The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	成化本『白兎記』譯註稿（四）
Author(s)	葛葉, 礼; 後藤, 安延; 高橋, 文治 他
Citation	中国研究集刊. 2005, 39, p. 151-193
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61153
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊 雨号（総三十九号）平成十七年十二月 一五一―一九三頁

成化本『白兎記』譯註稿（四）

加藤 聰　葛葉 礼　後藤安延　高橋文治　谷口高志
陳 文輝　冨永鉄平　豊田祐佳　西尾 俊　西川幸宏
藤原祐子　若松沙保　渡辺克平

本稿は、本誌調號・雲號および致號に掲載された「成化本『白兎記』譯註稿（一）～（三）」の續編（第十三出より第十九出まで）である。凡例その他については、前稿を參照いただきたい。

第十三出〔外（岳節度使）、二淨（小王兒・小張兒）、生、貼旦（岳秀英）〕

外上唱

1【引子】甚人偸盜袍去了。今夜便見分曉。

外白 莫信直中直、隄防（仁）〔人〕不（人）〔仁〕。老夫明日（鹽）〔監〕城遊賞、覓地尋取（白）〔百〕花戰袍不見了。

便有賊盜、怎生（迫）〔進〕來。想必是這二箇打更小的盜取了我的。不兎叫他過來。好歹機拷出來。左右。□〔二淨〕上白 廳上一呼、堦下百諾。（伏）〔覆〕大人、有何鈞旨。外白 誰人昨日打三更。淨・丑白 打三更卻如何。外白 打三更有賞。淨白 是我打來。丑白 是我打來。外白 老夫三更時候將（白日）〔百花〕戰袍失落了。淨白 不是我（等）〔打〕三更。丑白 也不是我打三更。外白（第了）〔弟子〕孩兒、不是你、也不是他、卻是誰。淨白 老爹、小的見劉（見）〔健〕兒身上穿着一領（白）〔百〕花戰袍、怕不是老爹的。外白 在那里。叫他出來。淨白、叫 劉（見）〔健〕兒、老爹叫你哩。丑白 關門屋里坐、禍從天上來。老爹、拜揖。外白 弟子孩兒、我（在）〔再〕三不用你、你再三的哀告、我留你在長行隊里。日間打草、夜間

提鈴喝號。未曾當軍一日、驀地將老夫(白)〔百〕花戰袍盜了。正是黑頭蟲兒不可救。[丑白] 小的夜至三更、(幔)〔漫〕天(不)〔下〕着大雪、小的身上寒冷、無處潛藏、在於老爹看花樓下(被)〔避〕雪、只見身上(洛)〔落〕下一領百花戰袍。小的看時、四下並無人行、老爹樓門又不(着)〔曾〕(間)〔開〕、想必天宮賜將下來。[淨白] 呸、人不(知)〔說〕不知、木不攢不透。我待不說、五毒氣生。天上怎麼賜(不)〔下〕來的袍。天上有織機的、有染坊、有裁縫。老爹、賊情事不打不招。[外白] 採將下去、先打四十大棍。[淨做打不的科] [外白] 這(所)〔厮〕有(背)〔弊〕、如何不肯下手。打他。〔淨白〕我小的打不的。[外白] 叫小(這)〔王〕(已)〔幾〕打。[丑(白)做打不的科] [外白] 你這厮、都靠(等)〔後〕。我打。[做打科] [貼旦上白] 手執無情棒、(二二)〔休要〕打平人。[外做打不(出)〔的〕科] [外白] 且下在牢中、等我(尤)〔在〕做商量。小王兒、打賊情事、見些甚麼。[淨白] 小的不知怎麼吊起手去了。[外白] 我問賊情事、是甚人叫休要打平人。[淨白] 小的見來。[外白] 是誰。[淨白] 是老爹家小姐叫來。[外白] 誰說。便替我叫將出來、我問他。[淨白] 小人知道。轉過孔雀屏風、就是畫堂深處。小姐、有請有請。

韻

蕭豪韻。

註 ○【引子】―「引子」二字は、原文では曲牌名として標記されず、小字で表される。汲本ではこの出の冒頭に【菊花新】を置き、兪本はそれに從って曲牌名を【菊花新】に改める。成化本中には、【引子】の標記をもつものとして他に第十三出第2曲に五句、第十五出第1曲には二句の曲文が見える。それらの曲名が何であるかはつまびらかにしないが、假に三曲とも同一曲牌だとすれば、あるいは【臨江仙】かもしれない。後の、本出第2曲「【引子】」の註參照。　○莫信直中直隄防(仁)〔人〕不(人)〔仁〕―成語。元刊本『事林廣記』「人事類」「結交警語」に「莫信直中直、須防人不仁」とある。前稿第三出「隄防(仁)〔人〕不(人)〔仁〕」の註參照。　○(鹽)〔監〕城―原文にいう「鹽城」は、文脈からして地名とは考え難いので、假に「鹽」を「監」に校訂した。待考。　○覓地―未詳。探す、の意か。「地」は「站地」「坐地」という場合の「地」と同樣で、二音節化するための語助であろう。あるいは、「寛地」を「驀地」の誤りとする考え方もあるかもしれない。　○(白)〔百〕花戰袍―『三戰呂布』第三折【迎仙客】に、呂布のいでたちとして「他那百花袍鎧是唐猊」とあり、『三國志演義』第三回に「披百花戰袍」、成化本第三一葉bにも「百花戰袍」とある。これらに從って「白」を「百」に校訂した。江本も同樣に校訂する。　○機拷―江本・兪本は、汲本によって「機」を「拶」に校訂するが、字形が遠く字音も異なるのでここでは改めなかった。「拶」は指を痛めつける拷問の一

種。　○[□□](二淨)上白―原文では空格が二字分あり、文字が脱落している。文脈により補った。前十一・十二出では「二淨」の脚色で登場したふたりが、本出の後文では「淨」と「丑」の脚色名で標記される。ただし脚色名の「淨」「丑」は、本テキストではしばしば混亂して用いられている。　○聽上一呼堦下百諾―常語。前稿第十一出註參照。　○(等)(打)―兪本がすでに「打」に改める。　○關門屋里坐禍從天上來―成語。前稿第八出註參照。　○驀地―突然、の意。(宋元)(漢)參照。○黑頭蟲兒不可救―「黑頭蟲」は、唐・寒山の詩に「寒山に躶蟲有り、身白くして頭黑し」(『寒山子詩集』)、「人是れ黑頭蟲なるに、剛(かえ)って千年の調を作す」(宋・惠洪『林間錄』巻下所引)とあるように、人間を指していうことば。項楚『寒山詩註』(中華書局、二〇〇〇)「寒山有躶蟲」詩の註(一)(二)參照。「黑頭蟲兒不可救」は、佛教說話に基づく成語。項楚前掲書の註(二)が擧げる唐・法照『淨土五會念佛略法事儀讚』末「鹿兒讚文」に「昔日 汝の命を救いしに、何ぞ今日鹿身を害するを期せんや。語を傳う黑頭蟲、世世 恩を與え難し」とあるほか、唐・義淨譯『根本說一切有部毘奈耶破僧事』巻一七に「其の井中に在る黑頭蟲は、恩義を識らず。必ず之を救う莫かれ」とあり、「黑頭蟲」は特に恩知らずの人間の意として用いられる(これらの佛教說話における「黑頭蟲」は、提婆達多の前身を指す)。なお、この成語の使用例としては『王粲登樓』第二折に「大王、久以後不得第便罷。若得第時、一時間顧盼不到、他便道、黑頭蟲兒不中救、俺也曾齎發你來」とある。　○在於老爹看花樓下(被)(避)雪―「被」は「避」の音通による誤り。江本・兪本がすでに同様に校訂する。　○人不(知)(說)不知木不攢不透―成語。『裴度還帶』第四折、『王粲登樓』第四折に「人不說不知、木不鑽不透、冰不搦不寒、膽不嘗不苦」とある。　○五毒氣―一種の常語で、怒りの心、の意。敦煌文書スタイン四六五四「舜子變」に「後阿孃見舜子跪拜四拜、五毒嗔心便起」とある。項楚『敦煌變文選註』(巴蜀書社、一九九〇)は、この「五毒」の語の典據として『周禮』「天官・瘍醫」の「凡そ瘍を療するは、五毒を以て之を攻む(ここの五毒は五種類の毒薬を指す)」を擧げるが、この語は佛教說話に基づくものであろう。漢・支婁迦讖譯『雜譬喩經』に「世の五毒無き人、其の肉湯を差(い)やすに中(よろ)し。此を服せば便ち差(い)ゆるを得。何等ぞ五毒爲るや。一なるは貪婬の心無きなり、二なるは瞋恚の心無きなり、三なるは愚癡の心無きなり、四なるは妬嫉の心無きなり、五なるは剋虐の心無きなり」とあるほか、敦煌文書ペリオ二三二四「難陀出家緣起(擬題)」に「三塗根本因次捨、五毒惡緣此日休」とある。○賊情事不打不招―「賊情事」は、惡事、の意。元・鄭介夫「上奏一綱二十目・刑賞」に「江西に路の司更有り、賊情事に因りて鈔五百錠・金銀一箱を受く」(明・楊士奇等編『歷代名臣奏議』巻六七「治道」所引)とある。「不打不招」は、常套表現。『寶娥冤』

第二折、『留鞋記』第三折等に同じ表現がある。　○淨做打不的科―劉知遠は後に皇帝となる人物であるため、淨は彼を打つことができない。第六出で、劉知遠の跪拜を受けた外と貼旦が倒れたのと同じ趣向。前稿第六出「外・貼做倒科」の註參照。　○這(所)(廝)有(背)(弊)―「所」は「廝」との字形の相似による誤り、「背」は「弊」との同音による誤り。江本・兪本がすでに同様に改める。　○小(這)(王)(巳)(幾)―江本・兪本は「小王兒」に校訂する。　○(淨白)―文脈により補う。江本・兪本も同様に補う。　○手執無情棒(二二)(休要)打平人―「二二」は、原文では磨滅字。江本・兪本に従って「休要」を補う。「手執無情棒」は、常套表現。『蝴蝶夢』第三折、『勘頭巾』第二折それぞれの張千の登場詩に「手執無情棒、懷揣滴淚錢」とある。○(尤)(在)―「尤」は「在」との字形の相似による誤りで、「在」は「再」との音通による誤り。

譯

外が登場してうたう

1【引子】誰が打掛けを盗んでいったのか。今夜になればすべてあきらか。

外のセリフ　「剛直だけが人を不仁から守る手立てだと思うな」とか。わしは明日見張りと遊山に出かけるので、百花戰袍を探したが見つからなかった。盗人が出たのだとしても、どうやって入ってきたのだろう。きっと、あの二人の夜回りが盗んだのだ。奴らを呼んで來させるとしよう。拷問にかけてとにかく白狀させるのだ。皆のもの。二淨が登場してセリフを言う　堂上で一たび呼び聲がすれば、階下から百の應答をいたします。長官さま、如何なるご用件でしょうか。外のセリフ　昨日、三更の夜回りをしたのは誰だ。淨・丑のセリフ　三更の夜回りが一體どうかしましたか。外のセリフ　三更の夜回りをした者には褒美がある。淨のセリフ　わたしがやりました。丑のセリフ　わたしがやりました。外のセリフ　わしは三更の頃に百花戰袍をなくしたのだが。淨のセリフ　わたしではありません。丑のセリフ　わたしでもありません。外のセリフ　こやつら目が、おまえではなく、そいつでもないなら、一體誰なんだ。淨のセリフ　旦那さま、劉健兒が着ていた百花戰袍は、旦那さまの物ではないでしょうか。外のセリフ　どこにいる。奴を呼んで來させろ。淨のセリフ、叫ぶ　劉健兒、旦那さまがお呼びだ。生のセリフ　門を閉ざして家の中にいても、禍は天からやってくる。旦那さま、ご機嫌よろしゅう。外のセリフ　こやつ目、おまえなどいらぬとわしは何度も言ったのに、おまえがその都度哀願してくるから、歩兵隊に入れてやって、晝間は草刈り、夜は見回りをさせることにしたのだぞ。

まだ一日も従軍していないくせに、にわかに百花戰袍を盗むとは。まさに「黒い頭の恩知らずは救うべからず」というやつだ。生のセリフ わたくし、夜も三更の時分に大雪が降り、身體は寒さに凍え、身を隱すところとて無いため、旦那さまの看花樓のもとで雪をしのいでいましたところ、見ればこの百花戰袍が落ちてきたのです。わたくしが見たときには、どこにも人一人おらず、樓門も開いていないので、きっと天からの賜り物だと思ったのです。淨のセリフ ちっ、「人は話さねば分からない、木は穿たなければ穴があかない」とか。言うまいとすると五毒の怒りがこみあげてくる。天がどうやって打掛けを賜うっていうんだ。天に機織り機があるか、染め物屋がいるか、仕立屋がいるか。旦那さま、惡事は打たなきゃ白狀しませんぜ。外のセリフ しょっぴいて、棒で四十打ってやれ。淨が打てないしぐさ 外のセリフ こやつ目、インチキをしやがった。どうして打とうとしない。打つのだ。淨のセリフ わたしは打てません。外のセリフ 小王兒に打たせろ。丑が打てないしぐさ 外のセリフ こやつら目、下がっておれ。わしが打つ。打つしぐさ 貼旦が登場してセリフを言う 手に無情の棒を取り、無實の人を打つのはやめてください。外が打てないしぐさ 外のセリフ しばらく牢屋に入れて、わしの沙汰を待て。小王兒、惡事を吐かせるとき、何を見たのだ。淨のセリフ どういうわけか手が吊るし上げられてしまいました。外のセリフ わしがこいつを白狀させているのに、打つのをやめろと言ったのは誰だ。淨のセリフ わたしは見ました。外のセリフ 誰だ。淨のセリフ 旦那さまのお嬢さまです。外のセリフ なんだと。連れてまいれ。わしが聞いてみよう。淨のセリフ 分かりました。孔雀の屏風を曲がれば、綺麗な堂舎の奥に至る。お嬢さま、お呼びです、お呼びです。

〔貼〕旦上白 奴在繡閣之中、繡作女工生活、只聽見父親呼喚、不免上前萬福。爹爹、萬福。外白 孩兒、我問賊情事、你因何叫休將屈棒打平人。貼白 委的是奴家說來。外白 孩兒、你是守閨之女、(元)〔緣〕何這等說話。從頭細說我聽。貼旦白 爹爹、實不相瞞。奴在繡閣之中、繡作女工生活、只見天窗上吊下一箇五花蛇兒來、在奴家面前左踅右轉、被奴趕至吊窗、就不見了。奴家看來、只見窗下一箇巡軍、聲音似虎嘯(童)〔龍〕吟。(汗)〔酣〕睡如雷、凍倒在地。奴家有惜孤念寡之心、有舊衣服尋一件與他遮寒、不想是爹爹百花戰袍。死罪奴家受、豈可累他人。外白 孩兒、是實。貼白 爹爹、奴家怎敢說謊。外白 (計)〔既〕是這等、孩兒、

你家去家去、自有方(料)〔略〕。貼白 父親、慈悲勝念千聲佛、作惡空燒萬炷香。貼下 外白 孩兒、我知道。左右、那里。淨丑白 小人在此。(伏)〔覆〕相公、那里受用。外白 小王兒、你與我爲媒、把小姐招劉(見)〔健〕兒爲婿。淨白 大人、胡說。要招、三箇都招在一處。外(唱)〔喝〕住 這廝、胡說。你就替我下親、參堂都是你。重重的賞賜你。便叫劉知遠(喚)〔換〕了衣服、香湯沐浴洗澡、交他冠帶成親。淨白 小人知道。轉過孔雀屏風、就是畫堂深〔處〕。畫堂深〔處〕(尤)〔風〕光好、別是人間一洞天。小姐、有請。

註 ○生活―「用品」の意。(漢)參照。　○吊下一箇五花蛇兒來―「吊」は「掉」としばしば通じて用いられる。(宋元)參照。○借孤念寡―常語。『看錢奴』第一折に「我也會齋僧布施、蓋寺建塔、修橋補路、借孤念寡、敬老憐貧、我可也捨的」とある。○(童)〔龍〕吟―「童」は「竜」の字形の相似による誤り。江本・兪本も同様に校訂する。「虎嘯龍吟」は常語。　○豈可累他人―第七出で、李三公が劉知遠を指して「他人後有發跡之時」というように、本テキストでは「他人」を「他」と同義で用いる例が散見されるが、ここの「他人」がそれにあたるかは判然としない。　○方(料)〔略〕―「料」は「略」との音通からくる誤り。『中原音韻』では、「略」を蕭豪韻(入聲作去聲)に列して「料」と同音とする。　○慈悲勝念千聲佛作惡空燒萬炷香―成語。ここでは、貼旦の退場詩の役割をする。元本『琵琶記』第二四出、末の登場詩に「慈悲勝念千聲佛、造惡徒燒萬炷香」とある。　○外(唱)〔喝〕住―兪本の校訂に從った。原文では「外唱」の二字のみが小字で表記されることから、江本は「唱」を「白」と讀み換えたうえで「住」をセリフの一部とするが、これは、元刊本元雜劇に特徴的なト書きの一部である「住」であろう。前稿第二出「打住」の註參照。ちなみに、元刊本『任風子』第二折、任風子が馬丹陽を殺そうとして、逆に「神」の返り討ちにあうシーンで唱う【窮河西】のト書きには「等神喝住」とある。　○參堂―宋・吳自牧『夢粱錄』卷二〇「嫁娶」の條に「其の禮官 兩新人に請いて、房を出で中堂に詣りて參堂せしむ」とあり、婚禮時に婚家の家神・家廟に參拜し、その親族に拜禮する儀式。ここでは、「禮官(媒酌人)」として、それら婚禮の一切をとり仕切ることをいうのだろう。　○(喚)〔換〕―文意により改めた。江本・兪本も同様に校訂する。　○就是畫堂深〔處〕畫堂深〔處〕(尤)〔風〕光好別是人間一洞天―本出前段に同表現があることから「處」を補った。二度目の「畫堂深」は、原文では三字のおどり字で表記されるが、同様に「處」字を補う。また「畫堂深處風光好、別是人間一洞天」は、常語。前稿第六出「列綺堆羅開大筵……別是人間一洞天」の註參照。

譯 貼旦が登場してセリフを言う　お部屋で針仕事をしていると、

お父さまがお呼びとのこと。進み出てご挨拶いたしましょう。お父さま、ご機嫌よう。外のセリフ むすめよ、わしが悪事を問いただした時に、おまえはどうして「無情の棒で無實の人を打つな」と叫んだのか。貼旦のセリフ まことにわたしがそういいました。外のセリフ むすめよ、おまえは深窗の令嬢だというのに、どうしてそんなことをいうのだ、一部始終詳しく聞かせてくれ。貼旦のセリフ お父さま、偽りは申しません、わたしがお部屋で針仕事をしている時、ふと見ると天窗から一匹のまだらの蛇が落ちてきて、わたしの目の前を行ったり來たりします。吊り窗まで追いかけると、いなくなってしまいました。ふと見ると窗の下に一人の見回りの者がいて、龍虎のうなり聲のような音。雷のような鼾をかいてぐっすりと眠り、寒さに凍えて臥せています。わたしは惻隱の心で、古い着物を一着探してその者に與え、寒さから守ったのです。はからずもそれがお父さまの百花戰袍でした。わたしは死罪にも甘んじます、しかしどうしてよそさまを卷き込むことができましょう。外のセリフ むすめよ、それは本當か。貼旦のセリフ お父さま、どうしてわたしが嘘をいいましょうか。外のセリフ そうであるなら、むすめよ、おまえは部屋に戻りなさい、わしに手だてがある。貼旦のセリフ お父さま、「慈悲の心は何千回の讀經にも勝り、惡事をなせば何萬本の線香をも無駄にする」と申します。貼旦が退場する 外のセリフ むすめよ、わかっておる。皆のもの、どこにおる。淨・丑のセリフ ここにおります。旦那さま、何の御用でしょうか。外のセリフ 小王兒、わしのために仲人になって、むすめを劉知遠に娶わせ、彼を入り婿にしてくれ。淨のセリフ 旦那さま、ご冗談を。婿にするなら我々三人ともが一緒でなければなりません。外が大聲をだす こやつ目、ふざけおって。おまえがわしのために婚儀を整え、式もおまえがとり仕切れ。褒美は厚くとらせる。すぐに劉知遠に着替えさせ、香湯で身體を洗い、衣冠束帶して緣組させるのだ。淨のセリフ わかりました。孔雀の屏風を過ぎれば、綺麗な堂舍の奥深くに至る。綺麗な堂舍の奥深くは見事な眺め、あたかも別世界にいるかのよう。お嬢さま、お呼びです。

貼(唱上)〔上唱〕

2【引子】一朵花枝今有主、親□(感)〔感〕謝老蒼天。生上唱 (【引子】)蒙君不棄我貧寒。洞房花燭夜、百歲永團圓。

外白 小王兒、唱拜。淨白 一上香、二上香、三上香。上香(以卑)〔已畢〕、望神天設(那)〔拜〕。(那)〔拜〕、(行)〔興〕、拜、(行)〔興〕、拜、(行)〔興〕、拜、(行)〔興〕。四拜。平身、回身。參拜堂上相公。拜、(行)〔興〕、

拜、(行)(興)。愛惜新人、只拜兩禮。[外白] 劉知遠、奉(間)(朝)廷(名)(明)有敕(皆)(旨)、招集義軍三千、如今收捕蘇林・袁角。如今招你爲婿。你休得(威)(畏)刀(背)(避)箭。如今權且冠帶、(帶)(待)你有功、老夫(伸)(申)報朝廷、加你官爵。就領三千人馬、用心操練、操練精熟、可以捉拿蘇林・袁角。早晚小心、不必祝付。[生白] 謝岳丈週濟。[外行(科)]

(詩曰)[外] 合(敬)(喜)交歡意(潑)(頗)濃。琴調瑟弄兩相同。[生白] 今宵(勝)(賸)把銀缸照、猶恐相逢似夢中。(並下)

韻 天田、干寒韻。

註 ○貼(唱上)(上唱)―このト書き以下が曲文と考えられるため、倒文として校訂した。次註參照。ちなみに江本では、ここからを新たな出として區切る。　○【引子】一朶花枝今有主……百歳永團圓―「一朶花枝今有主」以下五句とほぼ同様の曲文が第六出第1曲に見られ、ここでもこの五句を一曲とするのが自然だと思われるため、曲牌名を前に移した。第六出の相當の曲文については、その格律から曲牌名を【臨江仙】としたが、本曲もそれに倣って【臨江仙】に改めるべきかもしれない。前稿第六出「【臨江仙】」の註、及び本出第1曲「【引子】」の註參照。また、第二句「親□(威)(感)謝老蒼天」については、原文の「親」字の後にある一字分の空格を缺字と見做した。この句は【臨江仙】の句格上六字句であり、「老蒼」の語が熟さないうえに、第六出では相當句を「因緣感謝蒼天」に作ることからすると、「老」は衍字である可能性がある。　○拜(行)(興)―前稿第六出註參照。　○(威)(畏)刀(背)(避)箭―常語。死を恐れること。「背」は「避」の音通による誤り。『漢宮秋』第二折、『蕤丸記』第四折等に見える。　○領三千人馬―「三千人馬」は、「五千人馬」とともに、一軍を與えられ率いる際に用いられる常語。『五侯宴』第三折、『三戰呂布』第三折等に同様の表現が見える。　○[外行(科)]―兪本に從い校訂する。ただし、「行」字のままでは意味が通じがたく、何らかの誤りを含むかもしれない。また、直後に「[外]」のト書きが重複することから、このト書き全體が衍文である可能性もあり、ここではあえて譯出しなかった。　○(詩曰)[外] 合(敬)(喜)交歡意(潑)(頗)濃……猶恐相逢似夢中―外と生の退場詩であり、原文でも行頭を落として表記するため「[詩曰]」の標記を補った。『荆釵記』第一二出退場詩にも「合喜交歡喜頗濃。琴調瑟弄兩和同。今宵剩把銀缸照、猶恐相逢在夢中」とある。この後半二句は、宋・晏幾道【鷓鴣天(彩袖殷勤捧玉鍾)】詞の末二句に「今宵剩把銀缸照、猶恐相逢是夢中」とあるのを用いたもので、元本『琵琶記』第三六出退場詩、『東坡夢』第三折等にも見える。成化本の「似夢中」は、これらに從って「是夢中」とするべきかもしれない。また「剩把」は「儘把」の意。(匯)

参照。なお、人口に膾炙したと思われる晏幾道のこの詞句が、唐・杜甫「羌村」三首・其一の詩句「夜闌更秉燭、相對如夢寐」（『杜詩詳註』巻五）等に基づくことは、夙に、宋・王楙『野客叢書』巻二〇「詞句祖古人意」の條が指摘する。また、「合（敬）〔香〕」の「敬」は、字音の類似による誤り。江本に従い校訂する。「合香」は、『禮記』「昏義」に見える婚禮の儀式のひとつで、ここでは、婚姻の謂。　○〔並下〕―文脈により補う。

譯

貼旦が登場してうたう

2【引子】枝に咲く一輪の花は今あるじを得ました、天公にこのご縁を感謝いたします。生が登場してうたう あなたは素寒貧のわたしを捨ておかれず。洞房花燭のこの新婚の夜、百年のとわまで圓滿たるよう。

外のセリフ 小王兒、號令をかけろ。淨のセリフ 最初のお香をお供えし、二回目のお香をお供えし、三回目のお香をお供えする。さあ、お香はあげおわりました。天の神に拜禮しましょう。拜禮、もとい、拜禮、もとい、拜禮、もとい、拜禮、もとい。四拜いたしました。起き上がって身を正し、振り返って堂上の旦那さまに拜禮します。拜禮、もとい、拜禮、もとい。新郎新婦に敬意を表して、二度拜禮いたします。

外のセリフ 劉知遠、朝廷から敕旨をうけ義軍三千を招集し、いま蘇林・袁角を捕らえるのだ。いまおまえを入り婿にする。おまえは刀や矢をおそれるな。いまかりそめに衣冠束帶させ、功を立てたらわたしが朝廷に申し上げて、おまえに官職と爵位をくわえてもらおう。いま三千の人馬をひきいて、よく教練し、武術に熟達したら、蘇林・袁角をとらえることができるだろう。朝晩氣をゆるめるなとは、いうに及ぶまい。生のセリフ お義父さんのお助けに感謝いたします。詩に曰く 外のセリフ 婚禮の儀式で固めの盃を交わして喜びは殊に深く。琴と瑟の調べはぴたりと和して響く。生のセリフ 今宵はただ銀の燭臺をあかあかと照らし、この出逢いが夢の中かと疑うばかり。退場

第十四出〔丑（李弘一の妻）、旦、淨（李弘一）〕

丑上白 長江後浪催前浪、一替新人趲舊人。自從劉知遠去後、（人不不）〔不覺〕半年以上、（因）〔音〕信不通。昨日（令）〔和〕我老公兩箇商量、叫我姑姑出來改嫁。依我說、萬事皆休、若不依我說、把這賤人十磨九難、就折墮死他。（淨）〔丑〕叫 姑姑、姑姑。旦上唱

1【□□□】忽聽嫂嫂呼喚、奴家荒忙到此。

旦 嫂嫂、萬福。丑 姑姑、萬福。旦白 嫂嫂、請坐。丑白 姑姑、自從姑夫去後、不覺半年以來。旦白 嫂嫂、便是半年了。丑白 姑姑、昨日有書來了。旦白 嫂嫂、書上怎麼說。丑白 書上寫着軍便當了、因爲上陣落馬(樁)〔撞〕死了。旦白 嫂嫂、說死了、趁了嫂嫂甚麼願。(生)〔丑〕白 書上這們寫來、又不是我寫來。如〔今〕休閑說。你哥哥說、他那里死了、我這里改嫁。旦白 嫂嫂、交誰改嫁。丑 交你(二)〔找〕門廝當戶廝對(後)〔俊〕俏兒郎嫁了罷。旦白 嫂嫂、一馬一鞍、一夫一婦。焉肯(在)〔再〕嫁他人。丑 你如今不嫁。旦白 奴家就死、終身不嫁。丑 你眞箇不嫁。旦白 嫂嫂、不嫁、不嫁、只是不嫁。丑白 你眞箇不嫁、我叫你哥哥出來。李弘一、你好妹子打的我好呀。淨上白 湛湛青天不可欺、人心難比水長流、烏江不是無船渡、一夜夫妻百夜恩。(淨白) 老婆、老婆、他怎麼打你來。丑白 左手哄我一哄、右手一巴掌、(石)〔右〕手哄我〔一〕哄、踢我一左脚。踢的老娘尿順屁(二)〔眼〕流。淨白 老婆打來。丑 可不打來。淨白 眞箇打來。丑 可不眞箇打來。淨白 打了罷。笑科 精賤人、因何打(雁)〔傷〕你嫂嫂。旦白 哥哥、奴家不敢。淨白 你如今改嫁不改嫁。我有四條路兒柰何你。旦白 哥哥、那四條路兒、對奴家說。淨白 頭一條路兒、交你上天。第二條路、交你下地。第三條路、交你(丈)〔改〕嫁。若是不依、第四條路兒、小河邊安一(般)〔盤〕磨、日間挑水三百石、二麻、夜間挨磨到天明。旦白 哥哥、頭一件、上天無路。第二件、入地無門。(弟)〔第〕三、有夫的婦人實難改嫁。奴家(儜)〔寧〕依(弟)〔第〕四條路、情願挑水挨磨。淨白 我(把)〔打〕你這賤人、元來只要受苦。做打科

韻 支時韻。

註 ○長江後浪催前浪一替新人趲舊人—成語。宋・劉斧『青瑣高議』前集卷七所引、宋・丘濬「孫氏記」に「我聞古人之詩曰、長江後浪催前浪、浮世新人換舊人」とある。また、錢南揚校註『永樂大典戲文三種校註』(中華書局、一九七九)「張協狀元」第四八出、末の登場詩に「長江後浪催前浪、一替新人趲舊人」とあり、「一替新人」という言い方も成語として誤りではない。「替」は一種の量詞で、「代」「輩」とほぼ同意。錢南揚がすでに同樣のことを指摘する。　○(人不不)〔不覺〕—原文では、ふたつ目の「不」はおどり字で表記される。「人」は「不」、「不丶」は「覺」の略字體との、字形の相似からくる誤り。江本・兪本もすでに同樣に校訂する。　○(令)〔和〕—「令」は「和」との字形の相似による誤り。　○賤人—罵語。　○折墮死他—「折墮」は「折磨」の意。成化本第四二葉aに「折剋」といい、『醒世因緣傳』第五二回に「死心蹋地的受他折墮哩」、また『喩世明

言』巻三一「鬧陰司司馬貌斷獄」に「詩曰、亡命心如箭離弦、迷津指引始能前。有恩不報翻加害、折墮青春一十年」、「你算韓信七十二歲之壽、只有三十二歲、雖然陰騭折墮、也是命中該載的」ともいう。なお、(漢)は「折墮」の「墮」に「hui」と音註を付すが、前述のごとく成化本後文に「折剁」とある點から見て、「折墮」の「墮」は「墮」ではないと思われる。　○〔□□□〕―兪本は【西江月】とする。【西江月】が二句だけで用いられる例はないように思われるので、いま假に【□□□】とする。　○不覺半年以來―前文に「不覺半年以上」という表現が見えることから、この「以來」は「以上」に校訂すべきかもしれない。ただ、「以來」には「以上」ないし「上下」「左右」の意もあり、ここではあえて校訂しなかった。(宋元)(漢)參照。　○交你(二)〔找〕門―「二」は、原文では「武」の字形に似る。兪本・江本がすでに「找」に改める。　○(後)〔俊〕俏兒郎―「俊俏」で、すてきな、の意。兪本・江本がすでに同樣に改める。また「兒郎」はここでは「郎君」の意。　○一馬一鞍一夫一婦―成語。類似する表現として、敦煌文書ペリオ二六五三・三八七三他「韓朋賦」に「蓋聞、一馬不被兩鞍、一女不事二夫」とある。また同スタイン一三三「秋胡變文(擬題)」に「一馬不被兩鞍、單牛豈有雙車並駕」、『元史』巻二〇一「列女傳」(二)「衣氏」に「吾聞、一馬不被兩鞍。吾夫既死、與之同棺共穴可也」という表現が見られるほか、元本『琵琶記』第二二出【羅帳裏坐】第三曲に「公公、我一馬一鞍、誓無他志」とある。　○湛湛青天不可欺……一夜夫妻百夜恩―四句ともすべて成語で、淨の登場詩の役割をする。前稿第五出註參照。原文では、詩のごとく、行頭を落とし句毎に分かたれて表記されるが、押韻はしていない。　○左手哄我一哄……踢我一左腳―江本・兪本ともに「哄」を「拱」に改めるが、その意圖がよく判らない。ここでは、假に「哄」の原義で解釋した。　○(雁)〔傷〕―「雁」は、「鴈」と「傷」との字形の相似による「傷」の誤り。　○日間挑水三百石二麻―兪本は「石」を「擔」に改める。「石」と「擔」とは同音で、「擔」を「石」と誤用したのであろう。また、兪本は「二麻」の二字を削除するが、「二」(原文磨滅字)にはあるいは「切」字が入り「切麻」となるかもしれない。　○上天無路／入地無門―成語。宋・釋普濟『五燈會元』巻一七「南嶽下十二世・黃龍南禪師法嗣」「泐潭洪英禪師」に「當時若遇箇明眼衲僧、直教他上天無路、入地無門」とあり、『幽閨記』第七出【水調歌頭】に「上天天無路、入地地無門」とある。

譯

丑が登場してセリフを言う　長江の後ろの波が前の浪を促すように、若い世代が年寄りを追い拂っていく。劉知遠が去ってのち、半年以上も音信がありません。昨日うちの亭主と相談して、義妹を呼び出して再婚させることといたしました。言うことを聞けばよし、

もし従わなければ、このアマをいじめたおして、さいなんでやりましょう。丑呼ぶ 義妹や、義妹や。旦が登場してうたう

1【□□□】聞けばお義姉さんがお呼び、慌てて出て参りました。

旦のセリフ お義姉さん、ごきげんよう。丑のセリフ 義妹や、ごきげんよう。旦のセリフ お義姉さん、どうぞお掛けください。丑のセリフ 義妹や、あんたの亭主が行ってから、氣がつけばもう半年。旦のセリフ お義姉さん、半年になります。丑のセリフ 義妹や、昨日手紙があってね。旦のセリフ お義姉さん、なんて書いてありました。丑のセリフ 手紙には、兵隊になるにはなったが、戦場で落馬して死んだとか。旦のセリフ 死ぬだなんて、お義姉さんにおあつらい向きだわ。丑のセリフ 手紙に書いてあったんだ。あたしが書いたじゃないよ。さっそく本題に入ると、あんたのお兄さんが言うには、あっちが死んだんじゃあ、こっちは再婚だってね。旦のセリフ お義姉さん、誰が再婚するんですって。丑のセリフ あんたを、家柄のつり合った素敵な人に嫁がせるのさ。旦のセリフ お義姉さん、一匹の馬には鞍はひとつ、一人の夫には妻はひとりって言うでしょう。どうして再婚なんかできましょう。丑のセリフ 嫁がないっていうのね。旦のセリフ 死ぬまで一生嫁ぐものですか。丑のセリフ 本當に嫁がないのね。旦のセリフ お義姉さん、嫁がないったら、絶對嫁がない。丑のセリフ どうしても嫁がないというのなら、お兄さんを呼びましょう。李弘一、あんたの可愛い妹があたしをぶつんだよ。淨が登場してセリフを言う 公明正大な天は欺くべからず、永遠に盡きない長江の流れと違って人の心は變わりやすいもの、覇王項羽は渡し船がなかったから烏江を渡らなかったのではない、一夜の夫婦にも百夜の恩愛はある。女房や、女房や、あいつはどんな風にお前をぶったんだい。丑のセリフ 左手でごまかしておいて、その隙に右手でビンタ。右手でごまかしておいて、その隙に左足であたしを蹴ったんだよ。蹴られたお陰でちびっちまったよ。淨のセリフ 女房や、ぶたれたんだな。丑のセリフ そうさ、ぶたれたのさ。淨のセリフ 本當にぶたれたんだな。丑のセリフ そうさ、本當にぶたれたのさ。淨のセリフ ぶたれたんなら仕方がない。笑うしぐさ このアマめ、なんで義姉さんをぶちやがる。旦のセリフ お兄さん、あたしはそんなことしませんわ。淨のセリフ お前は再婚するのかしないのか。お前をこらしめる四つの方法が俺にはあるんだ。旦のセリフ お兄さん、

どんな四つの方法か話してみてください。淨のセリフ
まず第一はお前を天國に送り込む。第二は地獄に送り込む。第三は再婚させる。言うことをきかなければ、第四の方法は川邊に石臼を置き、晝間は桶三百杯の水を汲ませ、夜は夜明けまで石臼をひかせるのさ。旦のセリフ お兄さん、まず天國には行けないし、二つには地獄にも入れない。三つめに、夫がいる女は再婚もできない。それならむしろ四つ目の方法に従って、夜明けまで石臼をひきましょう。淨のセリフ
このアマめ、ぶってくれるわ、なんと、痛い目にあいたいとは。打つしぐさ

淨唱

2【三學士】頗奈非親卻是親。只好做奴婢(堪)(看)成。作賤劉郎去也無音信。如何不肯改嫁別人。你若不聽嫂(嫂)哥說、作賤身軀不值半分。從今後挨磨到四更。挑水到黃昏。丑唱

3〔【前腔】〕一世爲人只在勤。那討閑飯養你身。旦唱 嫂嫂爹娘產業奴有分。如何苦樂不(勾)(均)。

丑 呸。女生外向、死了外葬。有你甚麼分兒。丑唱

丈夫的言語須當聽。你有眼何曾識好人。從今後挨磨到四更。挑水到黃昏。旦唱

4〔【前腔】〕好笑哥哥人不(三)(仁)。不念同(胞)(胞)(子)(姊)妹情。劉郎去也無音信。如何交奴改嫁別人。況(閑)(間)奴有半載身懷孕。(在)(再)嫁傍人作話文。奴情願挨磨到四更。挑水到黃昏。

詩曰 好笑哥哥人不仁。(□)(父)母緣何不顯靈。日間挑水三百(不)(石)、夜間挨磨到天明。旦下

淨趕打科 丑白 老公、如今(計)(既)是這等、你便管他挑水、我便管他挨磨。等這賤人挑的挨的、也是一(顧)(頓)打。挑不的挨不的、也是一頓打。(下)(十)磨九難、好歹要他嫁了。見今十月滿足、他若是男怎麼說、是女怎麼說。淨白 老婆、是女收留養着、是箇小廝(殺必)(必殺)害了他性命。丑白 好計好計。計就月中擒玉兔、謀成日裏捉金鷄。亞下

韻 眞文、庚亭韻。「說」は失韻。

校記 汲本。 ○「頗奈」汲本「堪笑」 ○「只好」汲本「把你」 ○「奴婢堪成」汲本「乞丐看承」 ○「作賤劉郎去也」汲本「劉郎去了」 ○「如何」汲本「何」 ○「不肯」汲本「不」 ○「不聽」汲本「不依」 ○「嫂嫂哥」汲本「兄嫂」 ○「作賤身軀不值半分」汲本「打交身軀不直半分 ○3〔【前腔】〕汲本【前腔】 ○「只在」汲本「只要」 ○「討」汲本「得閑衣」 ○「你身」汲本「閑人」 ○「嫂

嫂爹娘」汲本「爹娘」　○「奴」汲本「都」　○「如何」汲本「何故」　○「不勾」汲本「不均平」　○「丈夫的」汲本「丈夫」　○「你有」汲本「有」　○「從今後挨磨到四更。挑水到黃昏」汲本「合前」　○4〔【前腔】〕汲本【前腔】○「不三」汲本「不仁」　○「同胞子妹」汲本「同胞兄妹」○「去也」汲本「去了」　○「如何」汲本「何故」　○「交奴改嫁」汲本「改嫁」　○「況閑」汲本「況兼」　○「半載身」汲本「身」　○「在」汲本「再」　○「奴情願」汲本「合 奴情願」

註 ○【三學士】―曲譜類に見える【三學士】は本來、六ないし七句で一曲をなす。本曲は八句で【三學士】の格律に合わないが、本曲と汲本とが內容・格律ともにほぼ一致するうえ、汲本が曲牌を【三學士】とするので、あえて改めなかった。汲本は、三曲すべての第七・八句目を合唱とするが(校記參照)、兪本は一・二曲目のみ第七・八句目を合唱とする。また、二曲目第四句は七字叶韻句であるから、汲本にしたがって「苦樂不均平」に校訂すべきかもしれない。なお、二・三曲目と比較するならば、一曲目第五句の「說」は失韻とすべきである。　○頗奈―「叵奈」「叵耐」に同じ。(匯)參照。汲本は「頗奈」を「勘笑」に作るが、ここではこれが「非親」にのみかかると考えて、改めなかった。○非親卻是親―成語。赤の他人に卻って親しむ、の意。主に夫婦の緣を指していうことばであろう。『張協狀元』第三八出退場詩に「我命非親卻是親」、元本『琵琶記』第三一出【月雲高】第三曲に「他不到得非親卻是親」とある。　○作賤劉郎―「作賤」は「作踐」とも書き、踏む・踏みつけにしてばかにする、の意。(宋元)參照。ここでは一種の罵語で、「賤人」といった意味であろう。　○嫂(嫂)哥―「嫂」の二字目は原文ではおどり字で表記されるが、この句は七字句なので、一字を削った。「嫂哥」は「哥嫂」と順序を入れ替えるべきかもしれない。　○身軀―「身軀」は「身軀」「身己」とも書き、「身體」と同意。○不值半分―常語。前稿第五出「不(知)(值)半分」の註參照。○3〔【前腔】〕―汲本に從って補った。第4曲についても同樣に補う。　○一世爲人只在勤―成語。前稿第五出「一年之計在於春一日之計在於寅一時之計在於勤」の註參照。　○那討閑飯養你身―常語。前稿第七出「那討閑飯(春)(養)閑人」の註參照。　○苦樂不(勾)(均)―常語。前稿第五出註參照。　○女生外向死了外葬―「女生外向」は成語。「女生外向死了外葬」は、「向」「葬」と押韻することから、二句合わせての成語であることを思わせるが、「死了外葬」を伴う例を見ない。漢・班固『白虎通義』卷三「封公侯」に「男生內嚮有留家之義、女生外嚮有從夫之義」とあり、敦煌文書スタイン一三三「秋胡變文(擬題)」に「女生外向、千里隨夫」とある。　○有眼何曾識好人―常語。『殺狗記』第二九出【大迓鼓】、『荊釵記』第二二出退場詩に「霸王空有重瞳目、有眼何曾識好人」というかたちで見える。

○況(閑)〔間〕―「閑」は「間」との字形の相似による誤りで、さらに「間」は「兼」との音通による誤り。　○話文―前稿第七出註參照。　○好笑哥哥人不仁……夜間挨磨到天明―旦の退場詩。汲本は前の二句を「哥哥嫂嫂沒前程、苦逼奴家再嫁人」とし、【尾聲】の曲牌をつけている。　○等這賤人挑的挨的―「等」は、今日も一部の方言に殘り、(宋元)が「讓」「使」の訓をあてる「等」の可能性もあるだろう。　○十月滿足―臨月をいう常語。　○養着―兪本は「着」を「者」に校訂する。　○是箇小廝(殺必)〔必殺〕害了他性命―江本は「殺」を誤りと疑い、兪本は「是箇小廝、殺」と斷句する。ここでは「殺必」を倒文として校訂し、「必殺害」として譯をつけた。　○〔丑白〕―文脈により補った。江本・兪本がすでに同樣に補う。

○計就月中搗玉兎謀成日裏捉金鷄―本出退場詩の役割をする成語。前稿第七出註參照。ここでは押韻の都合が必ずしもしもあるわけではないが、やはり「金烏」となるべきところを「金鷄」に作る。

譯

淨のうた

2【三學士】にくき赤の他人と夫婦の縁。(そういうことなら)お前を奴婢とするしかない。劉のやつはどこかへ行って消息不明。なぜ再婚するのを承知しないのか。もしもおまえが兄さん義姉さんの言うことをきかないのなら、死に損ないの何の價値もない奴め。これからは四更まで臼をひき。日暮れ時まで水を汲むがいい。丑のうた

3【前腔】人はまじめに働くことが一番。どうして無駄飯をせびってお前を養わねばならないのか。旦のうた お義姉さん お父さまお母さまの財産は私にも取り分があるはず。どうしてこんなに不公平なのでしょう。

丑のセリフ ちっ。「女は嫁に行くもの、死んでもよそに葬られる」というじゃないか。何の分け前があるものか。丑のうた

うちの人の言う事をきかぬか。お前に何が分かるっていうんだい。これからは四更まで臼をひき。日暮れ時まで水を汲むがいい。旦のうた

4【前腔】お兄さんが不仁の人だったとは笑いぐさ。血を分けた妹に何の情愛もないとは。劉郎はどこかへ行って消息不明。どうして他の人に嫁いだりできましょう。その上あたしは半年の身重。再婚すれば人がとやかく申しましょう。四更まで臼をひき。日暮れ時まで水を汲むのも望むところ。

詩に曰く お兄さんが不仁の人だったとは笑いぐさ。父母はどうしてその靈驗をあらわしてくださらないのか。晝は桶三百杯の水を汲み、夜は夜明けまで臼をひく。旦が退場する

淨が追いだして殴るしぐさ　丑のセリフ　おまえさん、こうなってしまった以上、おまえさんはあいつが水を汲むのを見張り、私はあいつが臼をひくのを見張る、あいつが水を汲み臼をひけば一回ぶつ、水を汲めなくても臼をひけなくても一回ぶつ。さんざん苦しめて、どうあろうとあいつを嫁に行かせちまおう。十月たって、あいつが生んだのが男ならどういう話で、女ならどういう話だい。淨のセリフ　女房や、女なら引き取って養うが、男ならば必ず殺してしまおう。丑のセリフ　それはいいそれはいい。「計劃が預めしっかりしていれば、月中に玉兎を捕まえ、太陽で金鶏を捉えることすらできる」というもの。一同退場

第十五出（旦、丑（李弘一の妻））

1【引子】旦上唱　沒奈(何)〔禍〕臨頭。今朝棄命休。

旦白　奴家迤二來到磨坊門首、半掩半開、冷冷清清。只得挨那磨去。一不恨天、二不恨地。

2【五更傳】旦唱　恨命乖。喫折挫。爹(嫂)〔娘〕知苦麼。哥哥嫂嫂你好(哏)〔狠〕心做。趕出我丈夫、發奴家挨磨。天不聞、地不嚶、如何過。旦白　奴家那曾那曾(實)〔識〕挨磨。挑水(心)〔辛〕勤、只爲劉大。（只爲劉大。）

3【(五更傳)〔前腔〕】向磨坊、愁眉鎖。受(苦)〔苦〕惱沒奈何。爹娘在時把奴如花朶。喪了我(又)〔雙〕親、受這般折(麼)〔磨〕。合同前

4【(五更傳)〔前腔〕】挨(已二)〔幾肩〕。我已肰頭(運)〔暈〕轉。我腹脇疼腿又酸。身子困(捲)〔倦〕我須挨不轉。只爲我的哥哥心變。我爹娘死、我孤單。我如何過。合同前

5【(五更傳)〔前腔〕】受苦(心)〔辛〕、如何過。受勞碌沒奈何。只得忍痛忍痛灣轉坐。受苦在磨坊、有那誰人採我。我尋思起、淚滿腮。愁難挨。又待要吊死吊死在廚房下。

旦白　我死一身由閑可、撇的我劉郎回來、倚靠誰過。

旦唱　我死也甘心、怕躭悞了劉大。合同前

旦白　奴家身懷六甲、兒夫去後、看看十月滿足。敢要分(免)〔娩〕孩兒。遍身疼痛、怎生是好。欲待不挨、哥嫂又打、欲待要挨、腹中不覺疼痛。只得在此盹睡一覺。做睡科　丑上白　養家千百口、獨自(樂)〔落〕便宜。我交你改嫁、終身不肯改嫁、交你挨磨、你可卻在這里睡得好。做打科　旦哭白　嫂嫂、奴家腹中疼痛。嫂嫂、休打。你回去、等奴家(在)〔再〕挨。丑白　我去、你不挨、我又來打你。得(前年)〔放手〕時須放手、得饒人處且饒人。丑下　旦白　奴家怎(生)是好。不一時(奴奴)〔嫂

嫂〕打、不一時哥哥罵。我奴家〔將〕〔終〕久喪在他手下。
這早不知是多早天氣了。推開窗看一看。呀。鷄犬亂
鳴了、敢是四更天氣了。

韻 1—鳩侯韻。2・3・4・5—歌羅、家麻、皆來韻。4—天田、歡桓韻。

校記 2—汲本、始譜、欽譜、增譜、新譜、定譜、納譜、醉本、綴本。○【五更傳】諸本【五更轉】 ○「恨命乖」納譜・綴本「只恨奴命乖」 ○「喫」諸本「遭」 ○「爹嫂」諸本「爹娘」 ○「哏心」諸本「横心」 ○「我丈夫」諸本「劉郎」 ○「發奴家」諸本「罰奴」 ○「天不聞、地不聰」諸本「叫天不應、地不聞」 ○「㕣奴家」始譜・欽譜・増譜・新譜・納譜「奴家」、綴本「㕣頭奴家」 ○「那曾實」汲本・始譜・欽譜・増譜・新譜・定譜「那曾識」、納譜・醉本・綴本「識」 ○「心勤」汲本・始譜・欽譜・新譜・定譜・納譜・醉本・綴本「辛勤」、増譜「辛□」 ○「只爲劉大。只爲劉大」汲本「只爲劉大」、始譜・欽譜・新譜・定譜「只因劉大」、増譜「□□□大」、納譜・醉本・綴本「也只爲劉大」

3・4—汲本、納譜、醉本、綴本。○3【五更傳】諸本【前腔】 ○「向磨坊」汲本・醉本「向磨房」、納譜「我向磨房」、綴本「我只向磨房」 ○「若惱」汲本・醉本・綴本「勞碌也是」、納譜「勞役也是」 ○「在時」諸本「在日」 ○「喪了我又親」汲本・納譜・醉本「死了雙親」、綴本「死了爹娘」 ○「受這般折麽。㕣同前」汲本「被哥嫂凌辱。爹娘死、我孤單、如何過。㕣前」、納譜「被哥嫂凌辱。爹娘死、我孤單、如何過。奴家那曾識挨磨。挑水辛勤、也只爲劉大」、醉本「被哥嫂凌辱。爹娘死、我孤單、如何過。㕣」、綴本「被哥嫂將奴凌辱。爹娘死、我孤單、如何過。㕣頭奴家那曾識挨磨。挑水辛勤、也只爲劉大」 ○4【五更傳】諸本【前腔】 ○「挨已」「、我已肰頭運轉」汲本「挨幾肩、頭暈轉」、納譜「只得挨幾肩、我頭暈轉」、醉本「捱幾肩、頭暈轉」、綴本「我只得挨挨幾肩、頭暈轉」 ○「我腹脇」汲本・醉本「腹脇遍」、納譜「腹肋遍」、綴本「腹脇偏」 ○「又酸」醉本「又」 ○「身子困捲我須挨不轉」汲本「神思困倦挨不轉」、納譜「神思困倦教我挨不轉」、醉本「神思困倦捱不轉」、綴本「神思困倦我好挨不轉」 ○「只爲我的哥哥心變。我爹娘死、我孤單」諸本は別の歌辭を置く。 ○「我如何過。㕣同前」汲本「如何過。㕣前」、納譜「如何過。願天保祐奴分娩但願。父子相逢、夫妻重見」、醉本「如何過。㕣」、綴本「如何遣。㕣 願天保佑奴分娩若得。父子團圓、夫妻重見」

註 ○【引子】—第十三出「【引子】」の註參照。汲本ではこの出の冒頭に【于飛樂】を置くが、その曲文は成化本とは全く異なる。 ○沒奈〔何〕〔禍〕臨頭今朝棄命休—「何」は「禍」との音通による誤りであろう。『翔鈔記』第二六出【糖多令】に「無奈禍臨頭。今朝拚死休」とある。 ○一不恨天二不恨地—汲本

では、相當部分を「一不怨哥嫂、二不怨爹娘、三不怨丈夫」とする。　○【五更傳】―【五更傳】はきわめて起源の古い曲牌であり、曲譜類は全て【五更轉】に作るが、錢南揚『元本琵琶記校註』（上海古籍出版社、一九八〇）第二六出、同『永樂大典戲文三種校註』「張協狀元」第三五出ではともに【五更傳】に作り、それらの註の中で錢南揚は、初期の南戲には「轉」を「傳」に作る例があり「傳」が必ずしも誤りでないことを述べる。ここではそれに従う。また、【五更傳】四曲は一套を成していると思われ、全體は家麻・歌羅韻で押韻するが、三曲目の前半六句は天田・歡桓韻に轉韻していると思われる。南戲においては、こうした轉韻はままみられることである（前稿第九出「【金蓮子】」の註參照）。また四曲目第九句「挨」は、失韻と考えるべきかもしれないが、ここでは「乖」「腮」「挨」等、皆來韻をすべて家麻韻と通押するものとした。なお格律からいえば、二曲目「合同前」の前に三字句三句の脱落があると考えられ、諸本はここに「爹娘死、我孤單、如何過。」の歌辭を置く。また三曲目の「只爲我的哥哥心變」は、格律からすれば「四、四。」となるべきであり、前半に四字不叶句一句が脱落していると考えるべきであろう。　○麼―疑問辭。すでに唐詩にみられる。（匯）參照。
○發奴家挨磨―兪本は汲本に従って「發」を「罰」に改める。
○天不聞地不應―常語。前稿第九出「叫天天不應天不應地不聞」の註參照。　○只爲劉大（只爲劉大）―二度目の「只爲劉大」は、原文ではおどり字。格律からすれば疊する必要はないので、衍文とした。　○把―「把」は「看」の意。前稿第七出「把來慣了」の註參照。　○（又）〔雙〕親―「雙」の簡略體「双」との字形の相似による誤り。江本・兪本がすでに同様に改める。　○挨（已二）〔幾肩〕―「肩」は原文では訛字。諸本に從って改めた。家畜がひくような「大磨」を肩で「挨」するので「肩」というのだろう。　○我已肰頭（運）〔暈〕轉―「肰」は未詳。江本は「肰」のままとし、兪本は「朧」に改める。「我已壟頭暈轉」と校訂して「私はすでにあぜ道で氣を失った」と譯すべきか、とも考えたが、格律からすればこの句は三字叶韻句であり、句作りとしては「我已肰、頭暈轉」と考えるべきである。ここでは假に「頭暈轉」のみを譯した。　○灣轉―江本・兪本は「彎轉」に校訂する。「灣轉」は疊韻の語。　○有那―待考。衍字かもしれない。　○由閑可―「由」は「猶」、「閑可」は「小可」「容易」と同意。（匯）參照。　○合同前―四曲目は二・三曲目で「合同前」であった箇所に別の歌辭を置き、その後さらにここで「合同前」と標記する。格律からこれを衍文とした。　○身懷六甲―前稿第九出註參照。　○敢要―「敢待」と同意。推量を表す。　○養家千百口獨自（樂）〔落〕便宜―常語。『張協狀元』第八出に「正是養家千百口、只恐獨自失便宜」、『藍採和』第二折に「我正是養家二十口、獨自落便宜」とあるのに從い、「樂」を「落」に校訂した。「落便宜」は、わり

を食う、損をする、の意。　○我又來打你―「又」は、ここでは「再」と同意で用いられている。　○得(前年)〔放手〕時須放手得饒人處且饒人―「得放手時須放手、得饒人處且饒人」は、成語。前稿第三出註參照。「前年」は、江本・兪本もすでに同様に改める。　○怎〔生〕是好―江本・兪本がすでに同様に校訂する。　○不一時―「不一時」は「一時」と同意。にわかに、同時に、の意。ここでは「不一時」が二度並列されることによって、「一面」と同様の意味になっている。　○(將)〔終〕久―江本・兪本がすでに同様に改める。　○這早―前稿第五出註參照。　○四更―普通「五更天」「五更鷄」としていわれる「五更」の時間が、ここでは「四更」で表されており、何らかの制度的背景を想定すべきであろう。

譯

1【引子】旦が登場してうたう　禍が身にふりかかることをどうすることもできません。今日にも命はおしまいになるでしょう。

旦のセリフ　はるかひき臼小屋の入り口までやって來ると、扉は半開き、中は寒々としております。臼をひくといたしましょう。一つに天は恨まず、二つに地は恨まず。

2【五更傳】旦のうた　恨めしいのはこの運のつたなさ。しいたげられております。父母はこの苦しみを知りましょうや。兄さん義姉さんは殘忍なことばかり。わたしの夫を追い出して、わたしに臼をひかせます。天は聞かず、地もこたえてはくれない、どう暮らしていけというのでしょう。合唱　思いがけず思いがけず臼をひくはめになろうとは。水汲みに精を出すのも、ただうちの劉旦那のため。

3【前腔】ひき臼小屋で、眉根は憂いにとざされる。辛いことばかりでどうにもなりません。両親健在の折には花のように育ったわたし。両親が亡くなって、このような仕打ちを受けることとなりました。合唱、前に同じ

4【前腔】何度か臼をひくと。氣が遠くなってしまいます。脇腹も痛く腿もだるい。身體が疲れて眠氣が襲い臼がひけません。ただ我が兄の心變わりのせい。両親が死に、私は獨り。どう暮らしていけというのでしょう。合唱、前に同じ

5【前腔】辛苦の中で、どう暮らしていけというのでしょう。あくせくと働かされてどうすることもできません。ただ痛みに耐えて痛みに耐えて丸くうずくまる。ひき臼小屋で苦しみ、誰もわたしを相手にしない。思いをめぐらせば、涙が頬をぬらし。愁いは耐え難い。いっそ臺所で首をくくってしまおうと思うが。

旦のセリフ　わたしが死ぬのはまだいいが、劉郎を見捨

てては、彼が戻って來てから誰を頼りに暮らしたものか。旦のうた

わたしが死ぬのはいいが、うちの劉旦那に迷惑をかけるのが氣がかり。

旦のセリフ 身重となって、夫が出て行って以來、そろそろ十月十日の臨月を迎えます。きっとすぐにも子どもが生まれるのかしら。身體中が痛んで、どうしたものか。臼をひきたくはないが、お兄さんお義姉さんにまたぶたれる、臼をひこうとすればお腹が痛む。このままここで一眠りすることといたしましょう。眠るしぐさ 丑が登場してセリフを言う 「何百何千の家族を養って、あたしだけが馬鹿をみる」というやつだ。お前を再婚させようとしたが、死んだっていやだというし、臼をひかせようとすれば、こんな所でぐっすりお休みかい。殴るしぐさ 旦が泣いてセリフを言う お義姉さん、わたしはお腹が痛いのです、ぶたないで。家に戻ってください、臼はひきますから。丑のセリフ あたしが行けば、お前は臼をひくまい。またぶちに來るからね。まあ「許せるときには許すがいい、見のがせるときには見のがそう」とも言うことだし。

丑が退場する 旦のセリフ わたしはどうすればよいのでしょう。義姉さんにぶたれたかと思えば、兄さんにも罵られる。わたしはじきに彼らの手にかかるに違いない。いま何更ごろかしら。窗を開けて見てみれば、おや、鶏や犬が鳴いている、きっと四更ごろでしょう。

旦唱

6【鎖南枝】星月上、傍四更。莊前犬鷄籬外鳴。哥哥甚(言)〔無〕情。把奴挨磨到天明。想我劉郎去也、未知前程。想的悞了年少人。

7【〔前腔〕】叫天不應。地不聞。〔腹〕〔脇〕〔脇〕轉疼實難忍。房兒冷清清。風刮的冷冰冰。料想分娩在今宵、有一箇懷藉恨。望祖宗有顯靈。保母子早離身。

旦白 奴家腹中疼痛甚急、今晚正(皆)〔該〕分娩孩兒。本欲在廚房中分娩、恐怕濁(活)〔汚〕了(皇)〔竈〕君、本在磨房中分娩、磨房中又冷冷清清。不免將一把(敢)〔乾〕草鋪在地上、分娩孩兒。正是烏鴉共喜(雀)〔鵲〕同林、吉凶事(余)〔全〕然未保。旦下 做分娩科

韻 庚亭、眞文韻。

校記 6—汲本、成譜、定譜、納譜、醉本、綴本。 ○「上」諸本「朗」 ○「莊前犬鷄籬外鳴」諸本「窗前犬吠鷄又鳴」 ○「哥哥甚言情」諸本「哥嫂太無情」 ○「把奴挨磨」成譜・

定譜・納譜・醉本「罰奴磨麥」、綴本「罰奴磨麵」　○「想我劉郎去也」汲本「想劉郎去也」、成譜・定譜「㕣想劉郎去」、納譜・綴本「想劉郎去」、醉本「劉郎去」　○「未知前程。想的悞了年少人」汲本・定譜・醉本「可不辜負年少人。磨房中冷清清。風兒吹得冷冰冰」、成譜・納譜・綴本「沒信音。磨房中冷清清。風兒吹得冷冰冰」

7―汲本、醉本、綴本。　○〔【前腔】〕諸本【前腔】　○「叫天不嚦。地不聞」汲本・醉本「叫天不應。地不聞」、綴本「叫天天不應。叫地地不聞」　○「脇轉」汲本・醉本「腹中遍身」、綴本「腹脇遍身」　○「實難忍。房兒冷清清。風刮的冷冰冰」汲本「怎忍」、醉本・綴本「怎禁」　○「有一箇懷藉恨」汲本・醉本「沒箇人來問」、綴本「俏沒箇人來問」　○「有顯靈」汲本「陰顯應」、綴本「陰顯靈」、醉本「陰靈應」　○「保」綴本「保佑」　○「早離身」諸本「兩身輕」

註　○【鎖南枝】―【鎖南枝】は、格律からすれば末尾四句が「三、三。三、三。」となるが、一曲目はこの部分が三字句であるとは見なしがたいし、また最後から二句目の不叶句が脱落していると考えられる。校記參照。　○〔言〕〔無〕情―「言情」は「顔情」と同意の「言情」とも考えられるが、諸本に從って「言」は「無」に改めるべきであろう。なお、江本・兪本も同様に改める。　○〔【前腔】〕―諸本に從って補った。　○叫天不嚦地不聞―常語。前稿第九出「叫天天不嚦天嚦地不聞」の註參照。

○〔腹〕〔脇〕〔脇〕轉疼―句格上この句は七字句であるので、「脇」の前に「腹」一字を補った。「脇」は、下腹部もしくは腋下を指す字であるが、本出第4曲【五更傳】に「腹脇疼」の表現が見られるので、「脇」を「脇」に改めた。なお、江本・兪本はともに「脇」を「腹」に校訂する。　○轉―だんだん、ますます、の意。清・劉淇『助字辯略』巻三參照。　○有一箇懷藉恨―待考。この六字に何らかの誤りを含むだろう。ここでは姑く汲本の「沒箇人來問」に從って譯をつける。　○離身―出産、の意。　○〔皆〕〔該〕―同音による誤り。江本・兪本がすでに同様に改める。　○〔活〕〔汚〕―字形の相似による誤り。江本・兪本がすでに同様に改める。　○〔敢〕〔乾〕―同音による誤り。兪本がすでに同様に改める。　○烏鴉共喜〔雀〕〔鵲〕同林吉凶事〔余〕〔全〕然未保―成語。『殺狗記』三四出退場詩等に「烏鴉共喜鵲同枝、吉凶事全然未保」とあり、それに從って校訂する。この成語の由來とヴァリエーションについては、錢南揚『永樂大典戲文三種校註』「張協狀元」第一出、校註(六一)を參照。なお、宋・彭□『墨客揮犀』巻二「喜鴉聲惡鵲聲」の條には「北人は鴉聲を喜みて鵲聲を惡み、南人は鵲聲を喜みて鴉聲を惡む。鴉聲は吉凶常ならざれども、鵲聲は吉多くして凶少なし。故に俗に喜鵲と呼ぶは、古の所謂乾鵲是れなり」とある。

譯

旦のうた

6【鎖南枝】星や月が上ってから、やがて四更になろうという頃。村の犬や鶏が垣の外で鳴く。お兄さんはなんて無情な人。夜明けまでわたしに臼をひかせる。思えば私の劉郎が行ってしまって、出世したものやらどうなのやら。あの人が戀しくて年若いわたしは苦勞ばかり。

7【前腔】呼んでも天はこたえてくれず。地も聞いてくれない。身體の痛みはいっそう耐えがたい。部屋は寒々として。風は冰のように冷たい。きっと今晩が出産のやま、誰一人たずねてくれるものはない。ご先祖様に靈驗があるなら。母子が身ふたつとなるのをお守りください。

旦のセリフ お腹の痛みが激しくなってきた。今晩がきっと出産のやま。臺所で出産したいが、かまどの神様を穢してしまうし、ひき臼部屋で產むには部屋が寒い。地面に乾草を敷いて產むことといたしましょう。これぞまさしく「不吉な烏がめでたい鵲と同じ林、吉とでるか凶とでるかは神のみぞ知る」。旦が退場する 出產するしぐさ

第十六出 〔末(寶老)、旦〕

末上(二)(白) (清)(青)竹蛇兒口、黃蜂(屋)(尾)上(丁)(釘)。兩般雖是毒、最毒(似)(婦)人心。惡有惡報。善有善報。若還不報。時辰未到。老夫姓寶名(無)(元)、人人口順呼爲寶老。是李大家都管的便是。李大公在日、把我一見如故。自從李大公亡(這)(過)之後、被李弘一天殺天剮、罵老夫無用之物。我如今不在他家、遷移在李三公家居住。李三公說、寶公、如今李弘一這廝把這劉知遠趕出太原府投(□)(軍)、音信不見回還。每日在家(寺)(待)他妹子朝嗔暮打、逼(勤)(勒)改嫁。他妹子因此不從、叫他日間挑水夜間挨磨、怎生是好。李三公說、我筭來、三姐女孩兒今經十月須足、寶公、你去探望一遭。轉灣抹(脚)(角)、這里便是磨坊。冷冷清清、並無一人、三姐不知歸於何處。

(旦)做咬臍、哭科 末白 待老夫尋叫一聲。呀、那里這等五五六六的孩兒哭。不免再叫一聲。三姐。旦白 寶公、奴家在此。末白 三姐、你敢分(免)(娩)了。旦白 奴家分娩了。一箇小廝兒。末白 好、好、好。李家時大、劉家骨血、兩堂聖賢保佑、落草平安。萬幸、萬幸。三姐、你可曾喫些粥食。旦白 寶公、我並無嚐些湯水。末白 娘子、少待、我問三叔公討些粥食與你喫。旦白 (草)(寶)公、卽去早來。(末)做掀倒磨科 末白 可憐三姐沒親娘。苦逼劉郎往外鄉。大風刮倒浮根樹、自有傍人話短長。末下

註 ○第十六出―兪本はここで出を區切らず、前出とひと續きに

する。　○(清)〔青〕竹蛇兒口……最毒(似)〔婦〕人心―末の登場詩。成語。『獅吼記』第一〇出、淨の登場詩に「青竹蛇兒口、黄蜂尾上針。兩般猶未毒、最毒婦人心」とある。ここでは、原文が「丁」に作るので「釘」に校訂したが、本來は「針」に作るべきである(「釘」と「心」でも、成化本においては押韻と認めうる)。また『醒世恆言』巻三〇「李汧公窮邸遇俠客」には「有詩爲證、猛虎口中劍、長蛇尾上針。兩般猶未毒、最毒婦人心」というかたちで見え、汲本は、相當部分の最終句を「最毒是婦人心」に作る。「青竹蛇」については、明・彭大翼『山堂肆考』巻二二三「鱗蟲・蛇」「青竹」の條に「青蟒蛇、一名 青竹蛇。綠色にして善く木及び竹上に緣る。此の蛇 最も猛し」とある。

○惡有惡報……時辰未到―成語。元刊本『事林廣記』乙集巻上「人事類」「警世格言」「存心警語」の條に「善有善報。惡有惡報。善惡無報。時節未到」、『來生債』第一折に「便好道善有善報、惡有惡報、不是不報、時辰未到」とある。なお、「若還」の「還」も、「如」の意。(匯)參照。　○都管―「管家」と同意。前稿第七出「管家官(二)〔鎮〕家兒」の註參照。　○姓寶名(無)〔元〕―「無」は、原文では「无」に作り、江本・兪本がすでに「无」を「元」に校訂する。富春堂本『白兎記』では「寶老」は「寶員」として登場する。「元」はおそらく「員」であろう。　○亡(這)〔過〕―「這」では意味が通じがたい。兪本に從って「過」に校訂する。　○投(□)〔軍〕―原文では行末に一字分の空格があるため、文脈から「軍」を補う。江本・兪本もすでに同樣に校訂する。　○音信不見回還―このままでは意味が通じにくい。「音信」の前後におそらく何らかの脱落があるであろう。たとえば『薛仁貴』第四折に「十年光景、音信皆無、不見回家」という表現が見られることから、ここでは「音信皆無」と語を補って譯した。　○[且]做咬臍、哭科―この出では且の登場はなく、しぐさは舞臺うらで行われるのだろう。なお「哭」は嬰兒のしぐさ。　○因此不從―「因此不從」の表現は、成化本第三八葉b七行目及び十三行目、及び第四四葉a九行目にも見え、いずれも「因爲不從」の意であるように見える。「因此」に「因爲」と同樣の用法があったのかもしれない。　○五五六六―「五五」は「嗚嗚」であろう。また「六六」については、普通どの文字で表記されるものかよくわからない。清・胡文英『吳下方言考』巻一〇に見える「錄錄」「漉漉」「陸陸」などの表記がそれにあたるかもしれない。　○你敢分(免)〔娩〕了―「敢」は、たとえば「敢是」「敢則(只・子)」等の語の二字目が脱落したものと考えるべきであろう。　○李家時大―待考。江本は「時」と「大」の間に脱字を疑う。「大」と「代」とは同音であるはずだから、ここでは「時大」を「後代」の誤りと考えて譯をつけた。　○我問三叔公討些粥食―「問」は「向」と同意。(匯)參照。　○[末]做掀倒磨科―前註で述べたように、この出での旦のセリフは全て舞臺うらで言われるものと考えられる

ので、做掀倒磨科のト書きに「末」を補った。李三娘に臼をひかせないためにそうするのであろう。　○可憐三姐沒親娘……自有傍人話短長―末の退場詩。三・四句目は成語を用いたもの。『殺狗記』第一七出退場詩に「大風吹倒梧桐樹、自有傍人話短長」、元本『琵琶記』第三〇出退場詩に「大家截了梧桐樹、自有旁人說短長」とある。第三句「浮根樹」は用例を見ないが、誤りではないだろう。三句目は、成化本第九出、外(李三公)の退場詩に見える「鳳凰落在梧桐樹」とは對照的に、不吉な事のたとえ。前稿第九出「做事欠商量……自有傍人話短長」の註、および本稿補註を參照。

譯

末が登場してセリフを言う　青竹蛇の口に、黄蜂の尻の針。どっちも毒だが、一番こわいのは婦人の心。惡には惡の報いがあり。善には善の報いがある。報いがないとすれば。まだその時でないだけのこと。わしは姓は竇で名は元、人は竇じいさんと呼び慣わしておりまする。李のご本家の執事でございます。李の旦那様のおいでの頃は、わしを初めてご覧になった時から舊友のごとくに扱ってくださいましたが、お亡くなりになってからというもの、李弘一の死にぞこないに無用の物と罵られるしまつ。今はご本家にはおりませぬ、李三公のお宅に移っております。李三公がおっしゃるには、「竇じいさん、李弘一のやつめは劉知遠を太原府に追いやり、便りもなければ、歸って來もしない。家では毎日妹を朝には叱り暮れには打って、再婚を迫ったが、妹はうんとは言わない、そこで晝は水汲み夜は石臼をひかせておるが、どうしたらよいものか」。李三公がまたおっしゃるには、「私が勘定するに、三姐はもう十月を越えておる、竇じいさん、おまえ行ってひとつ様子を見てきてくれまいか」。角を曲がれば、ここがひき臼小屋だ。ひんやりひっそりとして人っ子ひとりおらぬが、三姐はどこにいるものやら。旦、臍の緒を咬み切って、(子供が)哭くしぐさ　末のセリフ　ひとつ呼んでみよう。やや、どこじゃ、わあわあという子供の泣き聲。もうひとつ呼ばんわけにはいくまい。三姐。旦のセリフ　竇じいさん、ここですよ。末のセリフ　三姐、生まれたかね。旦のセリフ　生まれたわ、男の子です。末のセリフ　よいぞ、よいぞ、よいぞ。李家の子孫、劉家の跡取り。兩家のご先祖のご加護を得て、無事子供を產み落としたか。幸いなれ、幸いなれ。三姐、少しは粥でも食べたのかね。旦のセリフ　竇じいさん、汁物さえまったく口にしていないの。末のセリフ　若奥さま、少々お待ちを、私が三公にかけ合ってお粥を持ってきましょうぞ。旦のセリフ　竇じいさん、すぐ行って早く戻ってきてね。末、臼を倒すしぐさ　末のセリフ　ああ三姐は二親を亡くし。劉郎は遠い異鄉へ追いやられた。大風が

根をむき出した樹を吹き倒しても、人は何かととやかくいうもの。末退場

第十七出〔旦、末(寶老)、丑(李弘一の妻)〕

旦抱孩兒上科 旦(上)白 娘養我時受千辛萬苦、我今卻養孩兒。旦唱

1〔【步步嬌】〕如今養子方知父母恩厚。各自思前後。哥哥心(很)〔狠〕毒。嫂嫂不仁、暗使些兒機謀。逼奴家再招夫。劉知(這)〔遠〕你一似喪家狗。

2〔【□□□】〕(猶)〔欲〕待(軒)〔幹〕說冤仇。待說來誰(□)〔人〕採揪。(冤)〔冤〕孩兒得到頭。劉郎得自由。末上唱

3〔【川撥棹】〕我聞說道。三娘子分娩〔無〕憂。李三公交我來問候。旦唱(娘子)你(元)〔緣〕何(頓被)〔頻皺〕着(而)〔兩〕眉頭。(旦唱)寶公你近前來說事由。你傍前來說事由。

末白 娘子、我才打(歷)〔磨〕坊所過、只聽的你哥嫂二人商量害你子母二人。旦白 寶公、荅救、荅救。末唱

4〔【前腔】〕我只聽的、(似)〔你〕家嫂嫂絮絮叨叨。因此上荒忙交我便走。旦唱 寶公你且藏在後頭。他見了怎干休。他見了怎干休。丑上唱

5〔【五供養】〕我十中(二)〔缺〕九。聞說道三姑姑生下小窮劉。我老公曾分付。用機謀。將巧語花言啜陋。若是得入手。管交一命喪(情)〔清〕流。管交劉郎絕了後。

6〔【僥僥令】〕且喜姑姑添小口。旦唱 嫂嫂(已)〔幾〕度待不收。十月懷躭奴(心)〔生〕受。兒女(腮)〔眼〕前花水上漚。兒女(腮)〔眼〕前花水上漚。

7【尾聲】忙把粥。食來調(口)〔後〕。(草)〔莫〕待老(粟)〔來〕干生受。

丑白 姑姑、且喜。添了箇甚麼兒。旦白 嫂嫂、是箇小廝兒。丑白 不說小廝兒、萬事俱休、說起小廝兒來、就是我眼中釘肉中(揀)〔刺〕、好歹害了他性命。姑姑、拿來我看。旦白 嫂嫂、休要諕了孩兒。丑白 姑姑、你如何(死)〔如〕今(今)〔二〕四五(箇)〔六〕二你。姑姑、小河兒兩箇魚兒、我和你看去。旦白 嫂嫂、我不去。(旦)丑白 好歹要和你去。旦白 罷、罷。嫂嫂、我和你看去、只休諕了我孩兒。丑白 姑姑、你放心。做推(二)〔下〕水科

韻 鳩侯(粥)、姑模(毒)、蕭豪韻。「的」は失韻。

校記 1～4—汲本。 ○【步步嬌】汲本【步步嬌】 ○「如今養子」汲本「養子」 ○「父母恩厚」汲本「娘生受」 ○「恨毒」汲本「狠毒」 ○「些兒機謀」汲本「機謀」 ○「逼奴家」汲本「苦逼我」 ○「劉知這你」汲本「閃得我」

○〔□□□〕汲本【川撥棹】　○「猶待軒說冤仇。待說來誰□採揪。免孩兒得到頭。劉郎得自由」汲本「我欲待訴說箇冤仇。我欲待訴說箇冤仇。待說來誰人採揪。天若還念我孤單、天若還念我孤單、願孩兒易長易壽。子母每得到頭。免使劉郎絕嗣後」

○〔【川撥棹】〕汲本【前腔】　○「我聞說道。三娘子分娩憂」汲本「聞知三娘分娩無憂。聞知三娘分娩無憂」　○「交我」汲本「交咱」　○「問候」汲本「問憂」　○「娘子你元何頓被着而眉頭」汲本「聽伊家絮絮叨叨。聽伊家絮絮叨叨。覩前望後。竇老你緣何頻覷看兩頭。你緣何頻覷看兩頭」　○「竇公你近前來說」汲本「近前來問」　○「你傍前來說」汲本「近前來問」　○「〔【前腔】〕我只聽的」汲本「我聽的」　○「似家」汲本「伊家」　○「因此上荒忙交我便走」汲本「只得慌忙便走」　○「竇公你且藏在後頭」汲本「你且窩藏在僻處」

5―汲本、成譜、定譜。　○〔【五供養】〕諸本【五供養】　○「我十中二九」諸本「十中缺九」　○「聞說道三姑姑生下小窮劉」諸本「喜姑姑產下窮劉」　○「我老公」諸本「兒夫」　○「分付」汲本「囑付」、成譜・定譜「囑咐」　○「用機謀」諸本「怎干休」　○「將巧語花言」諸本「把花言」　○「啜陋」汲本「覓誘」、成譜・定譜「設誘」　○「若是得」汲本「倘說得兒」成譜・定譜「哄得這孩兒」　○「管交一命喪情流。管交劉郎絕了後」汲本「管交一命喪清流」、成譜・定譜「㊀管教一命喪清流」

6―汲本、始譜。　○〔【僥僥令】〕諸本【僥僥令】　○「且喜」諸本「喜」　○「嫂嫂已度」諸本「幾度」　○「十月懷耽」汲本「十月懷胎」、始譜「留十月懷擔」　○「奴心受」諸本「娘生受」　○「兒女」汲本「兒子是」、始譜「兒女似」

○「腮前」諸本「眼前」　○「漚」汲本「鷗」

7―汲本。　○「忙把粥。食來調口。草待老栗十生受」汲本「如今幸喜身唧嗒。把粥食頻調產後。莫待老來病成不救」

註　○〔【步步嬌】〕―【步步嬌】から【尾聲】までの曲文について、成化本では【尾聲】以外に曲牌名の標示がない。【步步嬌】【川撥棹】【前腔】【五供養】【僥僥令】の五曲は、曲辭・格律ともに汲本とかなり一致するため汲本の曲牌名に従った。第2曲は、前後にある【步步嬌】【川撥棹】の格律に收まらず、いま假に四句を獨立させて曲牌名不明の一曲とした。なお、江本・兪本は「劉郎得自由」まで十一句を【步步嬌】とする。第1曲の【步步嬌】は、その格律からすれば一句目は七字句だが、ここでは七乙になっていると思われる。また、【步步嬌】から【尾聲】までは鳩侯・姑模韻で押韻しているが、第4曲の第二句「叨」も通押すると考えられる。成化本では鳩侯韻と蕭豪韻が時に通押すると思われ、そうした例は第九出第10～12曲、本出第15曲にも見られる。　○喪家狗―『史記』卷四七「孔子世家」に「孔子 鄭に適くに、弟子と相い失い、孔子 獨り郭の東門に立てり。鄭人の子貢に謂いて曰う或(あ)りて『東門に人有り、其の顙は堯に似、其の項は皐陶に類し、其

の肩は子産に類す。然れども要(こし)より以下は禹に三寸及ばずして、纍纍たること喪家の狗の若し』と。子貢 實を以て孔子に告ぐ。孔子 欣然として笑いて曰く『形狀なるものは末なり。而るに喪家の狗に似るとは、然からん哉、然からん哉』と」とある。　○【□□□】―前註「【【步步嬌】】」參照。江本・兪本は、第1曲【步步嬌】に續けて一曲とする。本曲から【川撥棹】二曲目まで計三曲の曲文には、汲本の【川撥棹】二曲分に相當する曲辭が用いられている。校記參照。　○(猶)〔欲〕待(軒)〔幹〕―江本・兪本は、汲本に從って「猶」を「欲」に改める。『中原音韻』によれば「猶」は尤侯韻、「欲」は魚模韻だが、成化本にあっては尤侯韻と魚模韻はごくあたりまえに通押するから、「猶」と「欲」は同音だったと思われる。また、「軒」は「幹」の字形の相似による誤りで、さらに「幹」は「敢」の同音による誤りだろう。江本・兪本は、汲本に從って「訴」に改める。

○誰(□)〔人〕採揪―「□」は、原文では磨滅字。汲本に從って「人」を補った。「採揪」は「睬瞅」。かまう、の意。　○(兎)〔冤〕孩兒得到頭劉郎得自由―「兎」は「冤」の字形からくる誤りであり、「冤」は「願」の發音からくる誤り。また「到頭」は、清・翟灝『通俗編』卷一四「境遇」に「不到頭、沒下鞘」という成語を引くように、行くところまで行く、の意であり、「得到頭」で、終わりをまっとうする、の意。　○【川撥棹】―前註「【【步步嬌】】」參照。汲本の二曲の【川撥棹】は、一曲目と二曲目で格律が著しく異なる上、曲譜類に見える【川撥棹】とも格律を異にする。また、曲譜類に見える【川撥棹】は七句から成り、本曲は六句から成るが、本曲の格律は、元本『琵琶記』第五出や潮州戲文『金釵記』第四七出等、初期南戲に見える【川撥棹】にほぼ合致する。なお、江本・兪本は、本曲と次曲【前腔】とをあわせて一曲の【川撥棹】とする。　○分娩(無)憂―汲本に從って「無」を補う。江本・兪本もすでに同樣に校訂する。　○(旦唱)〔娘子〕―汲本および文脈から見て、これ以下が旦のうたと思われるため、一句後にある「旦唱」のト書きを前置し、「娘子」を衍字とした。　○(頓被)〔頻皺〕―江本は「顰皺」に改める。　○才打(歷)〔磨〕坊所過―「才」は時間を表す虛詞で「當」と同義。『張協狀元』第一六出に「我才叫你、便是我肚饑」、同第二四出に「才肚饑時、緊縛了腰、一番腰緊、便噯一噯」とある。また、「打」は「從」の意。「所過」は、これでひとつの動詞として考えるべきであろう。　○【前腔】―前註「【【川撥棹】】」參照。初句の「的」は、失韻と考えるべきだろう。　○十中(二)〔缺〕九―常語であろう。『金鳳釵』第二折【二煞】には「你道十日欠九日饑、三頓無一頓飽」という表現も見られる。　○花言巧語―常語。『朱子語類』卷二〇「論語」(二)「學而篇」(上)「巧言令色鮮矣仁章」に「或以巧言爲言不誠。曰『據某所見、巧言卽所謂花言巧語』」とあり、元曲にもしばしば見られる。　○啜陋―江本・兪本は「陋」を「誘」に校訂し、胡竹安「廣陵刻印校補

本《成化新編劉知遠還鄉白兎記》補正」（『中国語文』一九八四年第四期）は、「陋」を「漏」と疑う。「啜誘」「啜漏」ともに用例を見ず、また「陋」は韻字でもあるので、ここでは「啜陋」のままとした。「啜陋」「啜誘」「啜漏」のいずれにしても「啜賺」の意であろう。　○得入手―汲本は「得兒入手」に作る。この意味であろう。　○不收―「不收」は、作物などの不作をいうことば。　○(腮)(眼)前花水上漚―常語。子供のかわいさも短くはかないことをいう。元刊本『看錢奴』第一折【混江龍】に「自拿着殺子殺孫笑里刀、怎存的好兒好女眼前花」、『合汗衫』第二折【小桃紅】に「可兀的好兒好女都做眼前花、倒不如不養他來罷」、『救孝子』第一折【混江龍】に「今日箇孩兒每成人長大。我看的似掌中珠、懷內寶、怎做的眼前花」とある。「水上漚」も同様に、はかないもののたとえ。元刊本『竹葉舟』第四折【滾繡毬】に「你知道、榮華如水上漚。功名如石內火」とあり、『朝野新聲太平樂府』巻六「套數類」【仙呂】【點絳唇】所收、趙彦暉「省悟」第四曲【天下樂】に「想着你恩情、也不是永久。恰便似風中落花水上漚」とある。なお、江本・兪本は汲本に従って「漚」を「鷗」に改める。　○調(口)(後)―汲本が相當曲辭を「調產後」に作るのに従って「口」を「後」に改めた。「口」は「后」の字形の一部であろう。　○(草)(莫)待老(栗)(來)―汲本に従って改めた。兪本・江本もすでに同様に改める。　○眼中釘肉中(揀)(刺)―常語。前稿第八出「眼中疔肉中刺」の註參照。

○你如何(死)(如)今(今)(二)四五(箇)(六)二你―未詳。江本・兪本もこの一段に何らかの誤りを疑う。原文では、二字目の「今」はおどり字で、「箇」は「个」と表記される。『飛丸記』第一三出に「那時勉强應承、如今二四五六」という表現があり、これに従って校訂したが、意味内容は『飛丸記』とともに不明。「二四五六」は「放二四」との關連を思わせる。ここではとりあえず「你如何如今二四五六(二你)」とし、おまえはなんていい加減なんだ、の意とした。　○(且)(丑)白―文脈より改めた。兪本も同様に改める。　○做推(二)(下)水科―「二」は、原文訛字。江本・兪本がともに「下」に作る。いまそれに従う。

譯

旦が子供を抱いて登場するしぐさ　旦のセリフ　母は私を產んで大變な苦勞をしましたが、今度は私が產む番。旦のうた

1【步步嬌】子を產んで知る父母の恩の厚さ。一人であれこれ考えてみるに。お兄さんは殘酷。お義姉さんは不仁、かげで惡知惠にものをいわせて。私に再婚を迫る。劉知遠よあなたはまるで喪家の犬。

2【□□□】この恨みを訴えたい。訴えたいけれど誰が私にかまってくれましょう。子供が幸せになって。劉郎が氣ままに暮らせますように。末が登場してうたう

3【川撥棹】聞くことには。三娘さんは無事に出產したと

のこと。李三公の命でご機嫌伺いに参りました。旦のうた
どうして眉をしかめているの。賓じいさんや そばによって何があったか話してちょうだい。そばによって何があったか話してちょうだい。

末のセリフ 若奥さま、私がひき臼小屋を通ってくる時、あなたの兄さん兄嫁さんはあなたたち母子を殺そうと相談しておりました。旦のセリフ 賓じいさん、助けてちょうだい、助けてちょうだい。末のうた

4【前腔】聞けば、兄嫁さんはくどくどとうるさく話す。そこで私は急いで参りました。旦のうた 賓じいさんあなたはしばらく裏に隠れてなさい。彼らが見ればただではすむまい。彼らが見ればただではすむまい。丑が登場してうたう

5【五供養】あたしゃ十に九は事缺く始末。聞けば三姐が貧乏劉の小せがれを産んだらしい。うちの亭主の言うことには。からくりを使って。巧みな言葉で口車に乗せ。もし子供が手に入ろうもんなら。きっと川に流してしまって。劉の子孫を根絶やしにしてくれるわと。

6【僥僥令】義妹や子供が生まれておめでとう。旦のうた お義姉さん何度も流れかけ。十月十日私は苦しみました。子供なんて所詮は眼前の花や水上の泡。子供なんて所詮は眼前の花や水上の泡。

7【尾聲】粥を口に運んで。産後をととのえましょう。年をとって苦しむことがないように。

丑のセリフ 義妹や、おめでとう。どんな子だい。旦のセリフ お義姉さん、男の子です。丑のセリフ 男の子でなければ萬事まるくおさまったのに、男の子と言ったからには「眼の中の釘、肉の中の刺」ってもんだ。どうあろうと殺してしまおう。義妹や、こっちへきて私にも見せてちょうだい。旦のセリフ お義姉さん、赤ん坊を驚かさないで下さいね。丑のセリフ 義妹や、おまえはなんていい加減なんだ。義妹や、川に二匹の魚がいる、あたしゃあんたと見に行こうかね。旦のセリフ お義姉さん、私は行きません。丑のセリフ とにかく一緒においで。旦のセリフ しかたない。お義姉さん、一緒に行きましょう。赤ん坊を驚かさないでくださいね。丑のセリフ 義妹や、安心おし。水に突き落とすしぐさ

8【駐雲飛】旦唱 苦也孩兒。娘將萬苦千辛養下你。
旦白 (二)〔賓〕公、我的孩兒〔石礫〕〔失落〕。〔末白〕〔石礫〕〔失落〕孩兒〔杖〕〔救〕的在此。旦唱
你看頭臉上都是水。三魂將離體。兒。假若你先歸。死了我孩兒。誰替你娘爭口氣。正是父在軍中誰人報與他知。

誰人報與他知。末唱

9【換頭】三娘子聽啓。早是一箇(二)〔荷〕葉兒托住你兒。假若沈落水。怎能勾得見你。他、是一箇(恨)〔狠〕心賊。他這等忘恩、不念你同胞意。

末白 娘子、不要(顧)〔怨〕天恨地。末唱

只(顧)〔怨〕花開不遇時。李弘一螃蟹横行到(巳)〔幾〕時。螃蟹横行到(巳)〔幾〕時。旦唱

10【前腔】兄嫂無知。逼勒劉郎寫(逼)〔休〕書。逼勒投軍去。發奴在磨坊裏。知。生下咬臍兒。方纔三日。(去)〔丟〕他魚池里。正是人善人欺天不可欺。人善人欺天不可欺。末唱

11【換頭】三娘子聽啓。有話傷心誰訴你。不由老夫流痛淚。刀割心肝戲。他、是一箇短命(恨)〔狠〕心賊。他這等忘恩、不念你同胞意。送孩兒(稍)〔捎〕書寄信回。送孩兒(稍)〔捎〕書寄信回。

旦白 賓公、(是)〔似〕此怎生是好。末白 娘子、老(在)〔夫〕有一句話不敢說。旦白 賓公、但說不妨。末白 我(老)夫耳(間)〔聞〕的、劉官人在(賓)〔幷〕州太原府投充身役、有些好處。我老夫不辭辛(若)〔苦〕、把小官人送到(賓)〔幷〕州(九)〔太〕原府尋訪劉官人去。若是尋得着、就把孩兒投下、將養成大、着他搬取你。意下如何。旦白 (豆)〔賓〕公、三日孩兒、又無乳食、怎生去的。末白 這事都在老夫身上。老夫逢莊逢店、(計)〔討〕些乳食、好歹將養到他那裏。你若不依我說、你子母二人遲早落在他(平)〔手〕下。旦白 (計)〔既〕是這等、(豆)〔賓〕公、只是累及你老人家。末白 娘子、不必多言。將你白(二)〔絹〕單裙扯下一(副)〔幅〕、寫一封(皿)〔血〕書、見劉官人與他。

韻 支時、機微(目)、灰回(賊)、居魚韻。

校記 8—汲本。○「苦也」汲本「苦養」　○「娘將萬苦千辛養下」汲本「萬苦千辛生下」　○「你看頭臉上」汲本「頭臉上」　○「三魂」汲本「七魄」　○「假若你先歸」汲本「空教你枉出世」　○「我孩兒」汲本「孩兒」　○「替你娘」汲本「來與娘」　○「正是父在軍中誰人報與他知。誰人報與他知」汲本「好朶鮮花不遇時。好朶鮮花不遇時」

10—汲本。○【前腔】汲本【前腔】　○「兄嫂無知。逼勒劉郎寫逼書。逼勒投軍去。發奴在磨坊裏。知。生下咬臍兒。方纔三日。去他魚池裏。正是人善人欺天不可欺。人善人欺天不可欺」汲本「聽說因依。鐵打心腸也淚垂。直恁的行無禮。不得生惡意。嗟、他是小孩兒。與你何干、撇在荷池裏。人善人欺天不欺。人善人欺天不欺」

註 ○【駐雲飛】—四曲の【駐雲飛】のうち、一曲目と二曲目はやや格律を異にし、二曲目と四曲目とは曲辭の重複も見られるなど、

格律の共通性が認められる。また、一曲目と三曲目も格律の共通性が見られるので、ここでは一曲目と三曲目を【駐雲飛】、二曲目と四曲目をその【換頭】と判断した。ただし、そうだとすれば四曲目は末尾から三句目が脱落していることになる。また一曲目の「正是父在軍中誰人報與他知」は、「中」が韻字ではないので、二句とはせず一句とした。　○我的孩兒(石礫(失落)(宋唱)(石礫)(失落)孩兒(杖)(救)的在此―この一段は、待考。二度目の「石礫」は原文では二字のおどり字で表記される。ここでは「石礫」を「失落」、「杖的」を「救的」に改め、おどり字の前に「宋白」のト書きが入るものとし、全體を「我的孩兒失落。宋白 失落孩兒救的在此」として譯出した。なお、江本・兪本は「杖」を「放」に校訂する。　○三魂將離體―汲本は相當歌辭を「七魄將離體」に作る。「三魂七魄」は常語。なお、その詳細についてはそれぞれ、宋・張君房『雲笈七籤』巻五四「魂神部」「說魂魄」の條、および「制七魄法」の條に見える。　○(恨)(狠)心賊―罵語。　○螃蟹横行到(已)(幾)時―『殺狗記』第一〇出退場詩や、『瀟湘雨』第四折、正旦の退場詩に見える「常將冷眼觀螃蟹、看你横行得幾時」(『瀟湘雨』では「觀」を「看」に作る)という成語を用いたもの。「横行」は、蟹が横向きに進むことと、横恣なる行いとの雙關語。唐・皮日休「詠蟹」詩(『全唐詩』巻六一五)に「道う莫かれ 心に雷電を畏るる無く、海龍王の處にても也た横行すと」とある。(漢)參照。　○無知―罵語。『殺狗記』第三四出【三段子】に「忘恩負義無知賊」とある。　○(逼)(休)書―「逼」を、江本は「休」、兪本は「投」に校訂する。ここでは江本に從って改めた。　○人善人欺天不可欺―成語。元刊本『事林廣記』乙集巻上「人事類」「警世格言」「存心警語」の條、および『張協狀元』第三五出、旦の退場詩に「人善人欺天不欺、人惡人怕天不怕」とあり、『殺狗勸夫』第二折【耍孩兒】に「可不道人善人欺天不欺。也是我自買到他憔悴」とある。また、『漢書』巻七五「京房傳」に「邪說は人を安んずと雖も、天氣は必ず變ず。故に人は欺く可くも、天は欺く可からざるなり」、元刊本『事林廣記』同巻同條には「人可欺天不可欺、人可瞞天不可瞞」とある。　○心肝戲―江本・兪本は「戲」を「碎」に校訂する。いま假にこれに從って譯をつけた。　○短命―罵語。ろくでなし、の意。　○(是)(似)―同音による誤り。江本・兪本もすでに同樣に改める。　○但說不妨―常語。「但」は「只管」「儘管」の意。　○我(老)夫耳(聞)(聞)的―後文に「我老夫」の語が見えることから「老」を補った。また「聞」は「聞」との字形の相似による誤り。ともに江本・兪本が同樣に校訂する。　○有些好處―「好處」は、この場合は「出息」の意。『京本通俗小說』巻一五「錯斬崔寧」に「又因捨不得你、只典得十五貫錢、若是我有些好處、加利贖你回來、若是照前這般不順溜、只索罷了」とあり、『幽閨記』第七出【醉孃兒】に「結交在未遇之先、施恩在當厄之日。看此人一貌堂堂、

後來必有好處」とある。なお、汲本は相當箇所を「有些勾當」に作る。　○(九)〔太〕原府―文意より改める。江本・兪本もすでに同様に改める。　○投下―「投」は「歸」の意。　○搬取―ひき取る、の意。　○意下如何―常語。「意下」は「心中思量」「打算」の意。(宋元)參照。　○(平)〔手〕下―字形の相似による誤りであろう。江本・兪本がすでに同様に改める。○老人家―老人に対する尊稱。(宋元)參照。　○白(二)〔絹〕―「二」は、原文では舟偏に「冐」が組み合わさった字形。江本・兪本がすでに同様に改める。　○血書―「血書」の具體がわかるものとして、たとえば『西遊記』劇第一本第二折に、玄奘の出生を語る「血書」として「內有金釵二股、血書一封、上寫道『殷氏血書。此子之父、乃海州弘農人也、姓陳名萼、字光蕊。官拜洪州知府、攜家之任、買舟得江上劉洪者、將夫推墮水中、冒名作洪州知府。有夫遺腹之子、就任所生。得滿月、賊人逼迫、投之于江。金釵二股、血書一封。仁者憐而救之。此子貞觀三年十月十五日子時建生。別無名字、喚作江流』」という。

譯

8【駐雲飛】旦のうた　ああ息子や。母さんは大變なおもいをしてあなたを生んだのに。

旦のセリフ　寶じいさん、うちの子を見失ってしまったの。　末のセリフ　いなくなった子供は救ってここに。

旦のうた　頭の先からほら水びたし。驚いて魂も抜けんばかり。お前が。もし先に死んでしまったら。うちの子が死んでしまったら。いったい誰が母さんの無念を晴らすっていうの。お父さんは軍隊にいて誰が彼に知らせるというのでしょう。誰が彼に知らせるというのでしょう。末のうた

9【換頭】三娘さんおききください。幸いにも蓮の葉が子供を受け支えたのです。もし水に沈んでしまっていたら。どうして再び會えたことでしょう。やつめは、人でなし。かくも薄情で、肉親の恩愛もない。

末のセリフ　若奥さま、天地を恨んではなりませぬ。末のうた　ただ怨むは花が時節にめぐり遇わぬこと。李弘一め蟹の横歩きじゃないがお前がいつまで横行するか見てやろう。蟹の横歩きじゃないがお前がいつまで横行するか見てやろう。旦のうた

10【前腔】兄さん義姉さんは愚かもの。劉郎に迫って離縁狀を書かせ。軍隊に追いやり。わたしをひき臼小屋に追いやった。誰が知ろう。咬臍兒が生まれて。たったの三日で。池に投げ棄てられようとは。これぞまさしく「おとなしい者は人に騙されても、公明正大な天は誰も騙せぬ」というもの。「おとなしい者は人に騙されても、公明正大な天は誰も騙せぬ」。末のうた

11【換頭】三娘さんおききください。あまりに辛くてお話できぬ。知らず知らずに涙がこぼれる。切られるように胸が痛む。奴めは、死に損ないの人でなし。かくも薄情で、肉親の恩愛もない。子供を送り届け手紙を託して歸ってきましょう。子供を送り届け手紙を託して歸ってきましょう。

旦のセリフ 竇じいさん、こうなったらどうすればいいのでしょう。末のセリフ 若奥さま、わたしに手はありますが、よう申しませぬ。旦のセリフ 竇じいさん、いいから言ってごらんなさい。末のセリフ 聞くところによれば、劉どのは幷州太原府で軍に身を投じ、ちょっとは出世なさったとか。わしは勞をいとわずお坊ちゃまを幷州太原府へ送り屆け、劉どのを尋ねて參りましょう。もし探しあてられれば子供を渡して大きくしてもらい、あなたをひき取りに來てもらいましょう。お考えはいかがでしょう。旦のセリフ 竇じいさん、生後三日の赤ん坊、お乳もないし、どうして行けましょう。末のセリフ お任せください。村や旅籠でお乳をもらい、とにかく生かして劉どののもとにたどり着きましょう。さもなくば、あなたたち母子は遲かれ早かれ彼の手にかかってしまうのです。旦のセリフ だったら、竇じいさん、ご苦勞をかけるわね。末のセリフ 若奥さま、それなら早速。白絹のスカートを裂いて、血書を一通書いてください。わしが劉どのに會ってお渡し致しましょう。

旦唱

12【宜春令】竇公聽、訴因依。兄嫂不合沒道(禮)〔理〕。謝伊恩(意)〔義〕。把我孩兒送去爹行去。見劉郎說與他知。方三日離娘懷裏。你若還長成時。休忘了竇公救你恩(意)〔義〕。末唱

13【【前腔】】三娘子。免憂慮。劉官人他在邊廷習學武藝。他未能及第。料想他官差不由(已)〔己〕。待老漢送將你兒去。那其間方知(祥)〔詳〕細。小官人你若還長成時。休忘了子母今日分離。旦唱

14【【前腔】】兄和嫂、(兄和嫂)忒下的。三日孩兒撇在水底。謝伊恩(意)〔義〕。把我孩兒年月慇懃記。見劉郎細說(祥)〔詳〕細。你說方三日離娘懷里。你若還長成時。休忘了竇公恩(意)〔義〕。末唱

15【【前腔】】三娘子。免憂愁。事到頭來休久留。倘伊哥嫂。只怕他來時生奸(姦)〔狡〕。待老漢送將兒去。那其間方知(祥)〔詳〕細。小官人你若還長成時。休忘了子母今日分離。

旦白 竇公、到路途上小心在意。末白 娘子、老夫不必祝付。旦題詩四句

詩曰 孩兒一去痛傷情。鐵打心肝也淚(流)〔傾〕。困 見了劉郎如此說。(計)〔記〕取孩兒劉咬臍。末下 旦唱

16【臨江仙】孩兒一去淚交流。天呀馬行十步九回頭。如今不敢高聲哭、閣淚汪汪不敢流。下

韻 12・13・14・15―機微(的)、居魚、支時韻。15―鳩侯、蕭豪韻。16―鳩侯韻。

校記 12―汲本、始譜。○「兄嫂不合沒道禮」汲本「兄嫂無知。將他撇在水」、始譜「兄嫂不仁沒道理」　○「謝伊恩意」始譜「謝你恩義」　○「送去爹行去」汲本「送到爹行處」、始譜「送到爹行去」　○「見劉郎說與他知方三日離娘懷裏」汲本「見劉郎說詳細。問的實甚年歸計」、始譜「見劉郎訴說詳細。問他到幾時歸去」　○「你若還長成時」汲本「否 我兒。長成時」、始譜「若長成時」　○「寶公救你恩意」諸本「寶公恩義」

13―汲本。○「三娘子。兒憂慮。劉官人他在邊廷習學武藝。他未能及第。料想他官差不由巳」汲本「三娘聽拜諮啟。在邊廷習學武藝。要歸無計。料想他身不由己」　○「你兒去」汲本「他孩兒」　○「那其間方知祥細」汲本「便知他行藏在何處」

註 ○【宜春令】―三曲目・四曲目については校訂すべきテキストがないが、その格律から【前腔】とした。また、四曲目の最初の五句は、鳩侯・蕭豪韻に轉韻していると思われる。一套內での轉韻については、前稿第九出「〔【金蓮子】〕」の註參照。また、鳩侯・蕭豪韻の通押については、第十七出「〔【步步嬌】〕」の註參照。なお、三曲目第二句「兄和嫂」は、原文では二字分のおどり字。曲律からみて衍字とした。　○因依―「事因」「原因」と同意で、「說因依」「聽因依」は、「說事因」「聽事因」と同意。前稿第九出「一嫁劉郎得半春……只得撮土焚香事有因」の註參照。『永樂大典戲文三種』に「聽說因依」などの表現が頻見される。

○不合―前稿第九出註參照。　○送去爹行去―「行」は、元朝期のいわゆる直譯體に見られる「根底」と同樣、與格・位置格を表す一種の格接尾語。この「行(音杭)」は北宋期の詞から現れ、『水滸傳』あたりまでその用例が見られる。(匯)(宋元)參照。なお、江本はふたつめの「去」を「處」に校訂し、兪本はひとつめの「去」を「到」に校訂する。　○官差不由(巳)〔己〕―常語。前稿第十二出「差使不由(巳)〔己〕」の註參照。　○下的―「舍得」「忍心」の意。前稿第七出「下辦的」の註參照。

○那其間―方位を表す「其間」の語に「這」「那」が附くと、時間副詞になる。「這其間」「那其間」は、この時、その時、の意。(宋元)參照。　○年月―ここではいわゆる「年月時日(＝八字)」の意。第十八出「血書」の註で引いた血書にも末尾に「八字」が見える。　○事到頭來休久留―常語。元本『琵琶記』第一六出に「路當險處難回避、事到頭來不自由」と言い、『幽閨記』第一七出【古輪臺】に「事到如今、事到頭來、怎生惜得羞恥」、『小孫屠』第一五出【孝順歌・換頭】に「事到頭來、全無區處」と

あるように、後半にはさまざまなヴァリエーションがあったと思われる。　○旦題詩四句―「旦題詩四句」とのト書き自體がきわめて異例であるが、以下に引かれる四句の場合、「旦が四句の詩を題す」と言いながら、後半二句は末の句となっており、しかも四句それぞれの句末が「情」「流」「說」「臍」と、落韻している點も奇異である。因みに汲本ではこの詩四句を「三日孩兒撇在池。鐵打心腸也淚垂。若見劉郎備細說、記取名兒叫咬臍」に作り、成化本と似た表現を用いながらも落韻がない。ここでは、第三句「說（音稅）」と第四句「臍」が齊微韻で押韻していると一應考えられるので、第二句目「流」を「傾」（第九出第22曲に「鐵打心腸也淚傾」との表現が見られる）に改め、第一・二句が庚青韻で押韻できるよう校訂した。　○鐵打心肝也淚（流）〔傾〕―常語。前稿第九出「就是鐵打心腸也淚傾」の註參照。

○【臨江仙】―本曲は【臨江仙】の格律には合わないが、第九出第23曲にも【臨江仙】が用いられ（その部分も【臨江仙】の格律に合わない）、そこでの【臨江仙】と本曲とに格律上の共通性が見られるため曲牌名はあえて改めなかった。前稿第九出「【臨江仙】」の註參照。なお、第九出末尾の【臨江仙】が詞であるならば、ここも詞かもしれない。　○馬行十步九回頭……閣淚汪汪不敢流―前稿第九出「馬行十步九回頭……閣淚汪汪不敢流」の註參照。

譯　旦のうた

12【宜春令】賓じいさんお聞きなさい、私が言うのを。兄夫婦はふとどきにもでたらめ。あなたには感謝致します。我が子を父親のところに連れて行ってくれるとは。劉郎に會って教えてください。たった三日で母親の懷を離れたことを。お前がもし成長したなら。賓じいさんの恩を忘れるでない。末のうた

13【前腔】三娘さん。心配するでない。劉どのは前線で武藝に勵んでおられる。まだ及第せぬとはいえ。思えば宮仕えはままならぬもの。わしがあなたの子供を連れて參れば。その時はじめて細かいことがすべて分かるはず。坊ちゃんや そなたが大きくなったら。今日母と別れたことを忘れるでない。旦のうた

14【前腔】兄さん義姉さんは、むごい人。生まれて三日目の赤ん坊を川に投げ込んだ。あなたには感謝致します。我が子の生まれた年月日を懇ろに覺えて。劉郎に會ったら詳しく傳えてください。生まれてたった三日で母親の懷を離れたことを。お前がもし成長したなら。賓じいさんの恩を忘れるでない。末のうた

15【前腔】三娘さん。心配するでない。話が決まれば長居は無用。もしあなたの兄さん義姉さん。奴らが來れば惡だくみをはかる。わしがあなたの子供を連れて參れば。その時はじめて細かいことがすべて分かるはず。坊ちゃ

んや そなたが大きくなったら。今日母と別れたことを忘れるでない。

旦のセリフ 賓じいさん、道中くれぐれも氣をつけて。

末のセリフ 若奥さん、心配には及びません。 旦が詩を四句題す

詩に曰く 我が子は去って痛ましい。たとえ鐵の心の人でも涙を流さずにはいられまい。 末のセリフ 劉郎に會えばかく申しましょう。子供の劉咬臍を覺えておけと。 末退場 旦のうた

16【臨江仙】我が子は去って涙がしとどに流れる。ああ駒の十歩に九度は振りかえっているだろう。今は聲をあげては泣くまい、あふれる涙を押しとどめて流すまい。 旦退場

第十八出 〔生、貼旦(岳秀英)、末(賓老)、淨(小王兒)〕

生上白 煩惱不尋人、人(着)(自)尋煩惱。下官自從離了三姐、不覺一年以上、做贅在岳太師府中、端的是朝朝是寒食、夜夜賞元宵。不知我前妻李氏身(二)(體)如何。這兩日神思悶倦、憂疑不定、交下官羝羊(二幡)(觸藩)、進退兩難、卻怎生是好。 貼上 隔窗須有耳、窗外豈無人。相公、萬福。 生白 夫人、拜揖。 貼 相公在此自言自語、說(紫)(些)甚麼。 生白 下官不曾說甚麼。 貼 你因何說朝朝是寒食、夜夜賞元宵。敢是我家正月待官人不週。因何說羝羊觸(幡)(藩)、進退兩難。 生白 娘子、下官(着)(看)兵書來。 貼 相公、看到那裏。 生白 下官看到三國志中(間)(間)、張飛在霸陵橋與曹操對敵、大喝一聲、橋(捐)(塌)三(空)(虹)、横水逆流。因此曹兵不能近張飛、張飛不能近曹公。這是羝羊(二幡)(觸藩)、進退兩難。 貼 我則道(下官)(官人)說甚麼、原來在此看三國志兵書。 生白 娘子、我下官悶倦、與(不)(娘)子同飲一盃悶酒。交小王兒看守衙門、有事報我知道。左右。 淨(淨)(上)白 廳上一呼、堦下百(納)(諾)。(福)(覆)大人、那里使令。 生白 你與我看守衙門、有事報我知道。 淨白 是、小人理會得。

註 ○煩惱不尋人人(着)(自)尋煩惱—成語。『三元記』第一九出に「煩惱不尋人、人自尋煩惱」とある。前稿第九出「無煩惱要尋煩惱」の註參照。 ○岳太師—岳秀英の父は、第十一出では「節度使」として登場するが、ここでは「太師」となっている。「太師」は、三公のひとつ。 ○身(二)(體)—「二」は、原文ではにくづきに「本」がついた字形。民間の俗な略字かもしれない。 ○端的—本當に、實に、確かに、といった意。(匯)(宋元)參照。 ○朝朝是寒食夜夜賞元宵—常語。『梧桐雨』第

一折に「眞所謂朝朝寒食、夜夜元宵也」、元本『琵琶記』第三出に「玳帽筵中爇寶香、眞箇是朝朝寒食。琉璃影裏燒銀燭、果然是夜夜元宵」とある。　○羝羊(二)〔觸藩〕〔觸藩〕進退兩難―成語。『周易』「大壯」に「羝羊觸藩、羸其角」とあるのによることばで、『三國志平話』巻下に「羝羊觸藩、進退無門」とある。後半にはヴァリエーションがあって、他に「羝羊觸藩、兩無所據」という場合もある。「二」は原文訛字。原文では、舟偏に「蜀」に作る。　○隔窗須有耳窗外豈無人―成語。『管子』「君臣下」に「古に二言有り。牆に耳有り、伏寇側に在り。牆に耳有りとは、微謀外に泄るるの謂いなり」とある。また『清平山堂話本』「戒指兒記」、『舉案齊眉』第二折に「隔牆須有耳、窗外豈無人」とある。　○敢是―前稿第三出註參照。　○正月―江本・兪本は、下接の「待」とあわせて三字を「管待」に校訂する。○霸陵橋―ここに言う「張飛在霸陵橋與曹操對敵」とは、いわゆる「長坂坡の戰い」を言うものと思われるが、長坂坡の戰いで張飛・曹操が對峙する橋を、『三國志演義』第四二回では「長坂橋」、『三國志平話』巻中では橋名は記述されず、『劉玄德醉走黃鶴樓』劇第一折では「當陽橋」とする。「霸陵橋」とする例は成化本と汲本のみである。「霸陵橋」といえば、一般的には長安への出入り口にあたるそれであり、長坂坡の戰いの場面に現れるのは奇異である。ただし、『二刻拍案驚奇』巻一四に「霸王初入垓心內、張飛剛到霸陵橋」とあり、「長坂橋」が「霸陵橋」とされる物語があった可能性も否定できないので、校訂はしなかった。　○橋(捐)〔場〕三(空)〔虹〕横水逆流―『劉玄德醉走黃鶴樓』劇第一折に「在那當陽橋上、喝了一聲、橋場三横水逆流」とあるのに從って、「捐」を「場」に校訂した。「三(空)〔虹〕」については、『三國志演義』諸版本のうち、嘉靖本巻九と萬卷樓本巻五に「橋斷兩三虹(橋は折れて二三に)」という表現が見られるため、それに從って「空」を「虹」に校訂した。因みに「虹橋」とは橋桁のない橋をいい、ここでの「虹」は「橋」とほぼ同意で用いられていると思われる。なお、『劉玄德醉走黃鶴樓』劇に言う「三」も、本來「三虹」に作るべきものであろう。また、ここで三國故事を「三國志兵書」と呼んでいることは、三國故事の民間でのイメージを物語って興味深い。　○(下官)〔官人〕―文脈により改めた。江本が同樣に校訂する。　○淨(淨)〔上〕白―ふたつ目の「淨」は原文ではおどり字で表記される。文脈より「上」に改めた。　○聽上一呼堦下百(納)〔諾〕―常語。前稿第十一出註參照。

譯

生が登場してセリフを言う「心配事が人を捜し求めるのではなく、人が自ら心配事を捜し求める」とか。私が李三娘のもとを離れてから、早くも一年、岳太師の入り婿となって、まこと「毎日が寒食、毎晩が元宵」という生活。私の前妻の李三娘は元氣だろうか。この數日くさくさして

おもいが晴れず、あれこれと悩んで物事が定まらず、私は「牡羊が角を垣根に突き立てる」というやつで進むも退くもままならず、どうしたものか。貼旦が登場する「壁に耳あり、障子に目あり」とか。あなた、ご機嫌よう。生のセリフ 奥方、ご機嫌よう。貼旦のセリフ あなたここでひとりでぶつぶつと、いったい何をおっしゃっているのです。生のセリフ 私は何も言っておらぬ。貼旦のセリフ どうして「毎日が寒食、毎晩が元宵」とおっしゃるのです。きっと我が家のお正月があなたには行き屆いていないのでしょう。どうして「牡羊が角を垣根に突き立てる」というやつで進むも退くもままならぬ、とおっしゃるのです。生のセリフ 奥方、私は兵書を讀んでいたのだ。貼旦のセリフ あなた、どこまで讀んだのです。生のセリフ 私は三國志の「張飛が霸陵橋にて曹操と相い對し、一聲怒鳴れば、橋は三つに崩れ落ち、激しい流れも逆流した」というところまで讀んだのだ。だから、曹操軍は張飛に近づけず、張飛は曹操に近づけず、これこそ「牡羊が角を垣根に突き立てる」というやつで、進むも退くもままならぬ、というものなのだ。貼旦のセリフ 何をおっしゃっているのかと思ったら、なんとここで三國志兵書を讀んでいたのですね。生のセリフ 奥方、私は氣が滅いる、一緒に憂さ晴らしの酒を飲もう。小王兒に役所を守らせ、何かあれば私に報告させよう。皆のもの。淨が登場してセリフを言う 堂上で一たび呼び聲がすれば、階下で百の應答をいたします。長官さま、如何なるご用件でしょうか。生のセリフ お前は役所を守っておれ。何かあれば私に知らせよ。淨のセリフ はい、かしこまりました。

末上白 一路辛勤不自由。遠波喜得到(賓)〔幷〕州。孩兒送到爹行處、未審他人留不留。老夫多謝天地、一路上小官人並無些事。到得此處、問將(入)〔人〕來。說劉官人做了九州安撫之職。此(間)〔間〕是他衙門、不免逕進去。淨白 那里來的。末白 長官、拜揖。小人是徐州沛縣沙陀村來的、尋問劉知遠。淨喝住 題一箇劉字、全家(皆)〔該〕死。末白 長官、煩通報。淨白 大人、報事。生白 報何事。淨白 門前有箇賓老在此。生 夫人、下官家中有人來了。貼白 (計)〔既〕然有人、着他進來。生白 賓公、拜揖。末白 劉官人、你(道)〔倒〕好呀。撇的我三姐在家受千辛萬苦。生白 賓公、我知道。我在家中還喫他哥哥嫂嫂打罵。休說我不在家中不知着他怎麼凌逼。賓公、你懷中抱的甚麼東西。末白 是官人撇下半年的身孕、今經十月滿足、被他哥哥嫂嫂逼凌他改嫁、因此不從、發他日(間)〔間〕挑水、夜間挨磨、在磨坊中生下這箇孩兒。生白 (豆)〔賓〕公、你將來我看。(豆)〔賓〕公、多多虧你、異日不敢有忘。末白 官人、老(太)〔夫〕不

敢。生白 (豆)〔寶〕公、你且少待、等我稟過夫人、卻來請你。生(白)〔做〕下跪〔科〕 夫人、下官有句話告稟夫人知道。可是敢說不敢說。貼白 官人、有甚麼大事。請起、說與奴家知道。生白 夫人、下官在先撇下一箇前妻(字)〔李〕氏、今(以)〔已〕一年之上、被他哥嫂逼勒他改嫁、因此不從、發他在磨坊中、日間挑水、夜間挨磨、在磨坊中生下這箇孩兒、他不昧前因、央及(豆)〔寶〕老抱孩兒送在此處。(去)〔夫〕人、卻是收留他好、不收留他好。貼白 官人、(計)〔既〕是官人的骨血、(忘)〔怎〕的不收留下。左右、叫(豆)〔寶〕公進來。淨白 小人知道、(豆)〔寶〕公、進來。末白 老夫來了。夫人、拜揖。貼白 (豆)〔寶〕公、萬福。(豆)〔寶〕公、抱孩兒過來我看。官人、這孩兒生的頂平額(例)〔闊〕、(面)〔兩〕耳(與箇)〔垂肩〕和我官人一般模樣。淨白 嬝嬝、說話好差、不相劉爹相小王兒不成也。貼白 (豆)〔寶〕公、(自)謝你一路上鞍馬勞困。末白 夫人、那里有鞍馬勞困、遮着一子咆了一夜。貼白 官人、如今(抱)〔把〕孩兒收下。交(豆)〔寶〕公安歇(已)〔幾〕日、打發些盤纏、交老人家回去。生白 夫人說得是。末白 (夫)〔官〕人、夫人在上、我老夫回不去了。生白 因何回不去。末白 我老夫這一回去、被李弘一(去□)〔天殺〕天剮〔的〕、打的老夫肉泥爛醬。生白 (計)〔既〕是這等、夫人、就留(豆)〔寶〕公在此、看養孩兒、也是好處。貼白 官人、(易)〔甚〕好。貼題詩

詩曰 (豆)〔寶〕公 向日孩兒你可收。生、夫人 三年乳哺不須憂。末 兒孫自有兒孫福、莫與兒孫作遠憂。並下

註 ○遠波―「波」は宋元期に多く用いられた語氣助詞であり、現代漢語の「吧」に通じる。(匯)(宋元)參照。なお、江本・兪本は「波」を「渡」に校訂する。また、この語を含む四句は末の登場詩となっている。　○九州安撫―劉知遠が出世して「九州安撫使」になるというストーリーは、すでに『劉知遠諸宮調』に見えるが、歴史上の劉知遠にそうした事實はない。因みに、『五代史平話』は史實にもとづいて「北京留守」とする。「安撫使」は元來軍官であったが、宋・趙昇『朝野類要』「帥幕」の條が「安撫の權、以て便宜に行事す可く、俗に、先に施行して後に奏す、と謂うが如きの類なり」というように、勅命を受けて「便宜行事（上司の裁可を受ける前に便宜的に執行すること）」する者と意識された。『劉知遠諸宮調』が生まれた金代の制度としては『金史』巻四七「百官志」(三)「按察司」の條に「安撫司は人民を鎮撫し、邊防軍旅を譏察し、重刑を審錄する事を掌る」という。「安撫使」は按察官であった（「九州安撫使」という職名は現實にはなかったろう）。また、「按察」と「暗察」が區別なく混用されるように、按察官が身分を隠して隠密裏に内偵を進めた事實もあったようである。出世後の劉知遠が身分を隠して李三娘を訪ねる展開と「九州安撫」という架空職の設定は、恐らく關

連するだろう。　○淨喝住―第十三出「外(唱)(喝)住」の註参照。　○因此不從―第十六出註参照。　○不昧―佛教語。南宋・彌衍・宗紹『無門關』「百丈野狐」に「不昧因果」とあり、『佛祖統記』巻二一に「前因不昧」とある。　○生的頂平額(例)(闊)(面)(兩)耳(與箇)(垂肩)―北京圖書館本『萬卷星羅』巻二四「相法紀要」に引く「唐舉先生切相歌」「大貴相」の條に「頭平額闊天倉滿、兩耳垂肩不反輪」とあるのに從って「例」を「闊」、「面」を「兩」、「與箇」を「垂肩」に校訂した。貴人の面相を言う常語。　○嬭嬭―ここでは、女主人に對する敬稱。(宋元)参照。　○(自)謝你―文脈から「自」を衍字とした。　○遮着二字咆了一夜―未詳。「二」は原文訛字で、「衞」から「行」を取り去った字形に似る。江本・兪本は「二」を「圍」に、「咆」を「跑」に校訂する。貼旦の「謝你一路上鞍馬勞困」を承けた打諢であろう。ここでは「遮着圍子、抱了一夜」と考えて譯をつけた。　○打發―「應付」の意。(宋元)参照。　○(去□)(天殺)天剮(的)―第七出に「天殺天剮的」という罵語があるのに從って校訂した。前稿第七出「天殺天剮的」の註参照。　○肉泥爛醬―『西遊記』第七四回に「往山南一滾、滾殺五千、山北一滾、滾殺五千、從東往西一滾、只怕四五萬研做肉泥爛醬」とある。　○三年乳哺―「十月懷躭、三年乳哺、迴乾就濕、咽苦吐甘」は、『父母恩重經講經文』(敦煌文書ペリオ二四一八)に基づく成語。　○貼題詩―第十七出「旦題詩四句」の註参照。　○兒孫自有兒孫福莫與兒孫作遠憂―成語。『蝴蝶夢』楔子に「兒孫自有兒孫福、莫與兒孫作遠憂」とあり、『宋詩紀事』巻九〇に引かれる、徐守信「絶句」詩に「兒孫自有兒孫計、莫與兒孫作馬牛」、『漁樵記』第三折、正末の登場詩に「兒孫自有兒孫福、莫與兒孫作馬牛」とある。

譯

末が登場してセリフを言う　旅程は辛くままならぬ。遠路はるばるありがたくも幷州に着いた。坊ちゃんを父親のところまで送り屆けようにも、あの方が引き取ってくださるかわからない。わたしは天地に感謝いたします、旅のあいだ坊ちゃんの身に何事も起こらなかったことを。ここに來たからには、人にきいてみましょう。なんでも劉どのは九州按撫の職についておいでとか。ここはあの方の役所であるからには、直接入って行きましょう。淨のセリフ　どこから來た。末のセリフ　長官さま、ご挨拶申しあげます。わたくしは徐州沛縣沙陀村から劉知遠を尋ねてきた者。淨、一喝する　劉の一字を口にすれば、一家皆殺しだぞ。末のセリフ　長官さま、面倒ですがお知らせください。淨のセリフ　だんな様、ご報告します。生のセリフ　何の報告だ。淨のセリフ　門前に竇じいさんが來ております。生のセリフ　奥方、我が家に來客じゃ。貼旦のセリフ　入ってもらいなさい。生のセリフ　竇じいさん、ご機嫌よろしゅう。末のセリ

フ 劉どの、結構なことですな。殘されたうちの三姐は實家で千萬の苦しみを受けておりますよ。生のセリフ 寶じいさん、知っているとも。わたしが家にいた時もお義兄さんお義姉さんから打たれ罵られていた。わたしが家にいなければ彼女がどんなに虐げられているかは言うまでもない。寶じいさん、懷にかかえているのは何だね。末のセリフ あなたさまが半年の身重の身を殘して行かれ、いま十月が滿ちて、お兄さん兄嫁さんに再婚を迫られても、從わなかったために、晝は水汲み、夜は臼をひかされて、ひき臼小屋で產み落としたのがこの子です。生のセリフ 寶じいさん、私に見せてくれ。寶じいさん、本當にあなたのおかげだ。今後忘れることはないだろう。末のセリフ だんな樣、めっそうもありません。生のセリフ 寶じいさん、少し待っておくれ、わたしが奧方に報告してから、あらためてあなたを招き入れよう。生が跪くしぐさ 奧方、あなたに話さなければならないことがあるが、言えるも言えないもない。貼旦のセリフ あなた、どうしたと言うんです。立ち上がって、私に話して下さいな。生のセリフ 奧方、私には前妻の李氏がいて、捨ててもう一年になる。彼女の兄と兄嫁は彼女に再婚を迫ったが、從わないため、彼女はひき臼小屋にやられ、晝間は水汲み、夜は石臼をひかされている。彼女はひき臼小屋でこの子を產み、けなげにも因緣を忘れず、寶じいさんに賴んでここまで抱いて送り屆けて來たのです。奧方、この子を引き取ったものか、引き取らないものか。貼旦のセリフ あなた、あなたの實の子である以上、どうして引き取らないことができましょう。誰か、寶じいさんを中にお通ししなさい。淨のセリフ かしこまりました。寶じいさん、お入りください。末のセリフ 爺めがやって參りました。奧方、ご機嫌よう。貼旦のセリフ 寶じいさん、ご機嫌よう。寶じいさん、赤ん坊を見せてください。あなた、この子は頭のてっぺんが平らで、額が寬いですわ。きっと將來出世するでしょう。それに兩耳が肩まで垂れているところもあなたにそっくりよ。淨のセリフ 奧方さま、それはおかしいですよ、劉の旦那に似ないで小王兒に似てどうします。貼旦のセリフ 寶じいさん、道中ご苦勞だったわね。末のセリフ 奧方、何のご苦勞がありましょう。壁に隱れて一晩中抱いておりましたから。貼旦のセリフ あなた、この子を引き取りましょう。寶じいさんに何日かゆっくりしてもらって、幾らか旅費を世話してさしあげて、歸ってもらいましょう。生のセリフ 奧方の言うとおりじゃ。末のセリフ 旦那さま、奧方さま、わしは歸ることができません。生のセリフ どうして歸ることができないのです。末のセリフ わしが歸ろうものなら、あの李弘一の死にぞこないに、ぶたれてわしの

體はもうボロボロになりまする。生のセリフ そういうことなら、奥方、寶じいさんにここに留まってもらって、赤ん坊の面倒を見てもらうのもいいだろう。貼旦のセリフ よいお考えです。貼旦、詩を題す

詩に曰く 寶公 さきの赤ん坊は引き取るべきだ。生、夫 凶 懐に抱いて三年育てるのを憂うるでない。困 子や孫には子や孫の福がある、子孫のためにあれこれ心配するには及ぶまい。一同退場する

第十九出〔旦〕

1【桂枝香】旦唱 眉兒蹙翠。眼兒流淚。只得揑擔來挑、向肩膀上微微細雨。奴家兩脚、〔奴家〕兩脚、難行難立。只得挑水。(哏)〔狠〕心兒。兩陣西風起。滴(渦渦)〔溜溜〕敗葉兒飛。旦題詩

哥哥嫂嫂(□)〔沒〕前程。苦逼(二二)〔奴家〕改嫁人。日間挑水三百石、夜間挨磨到天明。〔下〕

韻 灰回、機微(立)、居魚、支時韻。

校記 汲本。 ○「眉兒蹙翠」汲本「孩兒一去」 ○「眼兒」汲本「眼中」 ○「只得揑擔來挑、向肩膀上微微細雨」汲本「全無力氣精神、更兼紛紛細雨」 ○「奴家兩脚、兩脚、難行難立。只得挑水」汲本「酸疼兩腿。兩腿難移。前去如何存濟」 ○「哏心兒」汲本「悶心兒」 ○「兩陣」汲本「一兩陣」 ○「滴渦渦敗葉兒飛」汲本「滴溜溜敗葉飛」

註 ○揑―未詳。「拿」の意か。 ○奴家兩脚〔奴家〕兩脚―二度目の「兩脚」は、原文では二字のおどり字で表記される。格律に従って「奴家」二字を補った。 ○滴(渦渦)〔溜溜〕―汲本に従って「滴溜溜」に改めた。ひゅるひゅるとまわる様子。『梧桐雨』第四折【笑和尚】に「滴溜溜颩閑堦落葉飄、疎刺刺刷落葉被西風掃」とある。 ○(□)〔沒〕前程―「□」は原文缺字。江本・兪本に従い「沒」を補う。「沒前程」は罵語。(宋元)參照。錢南揚『永樂大典戲文三種校注』「張協狀元」第二〇出【四換頭】に「遂功名、莫來適來反面沒前程」とあり、そこにも同様の註がついている。 ○(二二)〔奴家〕―「二二」を、江本は「拏」に作って「奴」に校訂し、「二」を「家」に校訂する。これに従う。

譯

1【桂枝香】旦のうた 眉根をしかめ。涙が流れる。やむなく天秤棒を擔ぎ、肩には細々と時雨がふる。私の両足は、私の両足は、歩くのも辛く立つのも辛く。水を擔ぐしかありません。無慈悲にも。ビュービューと木枯らしが起こり。カサカサと枯れ葉が舞い飛ぶ。旦、詩を題す

兄さん義姉さんは見込み無しの愚か者。無理矢理わたしに再婚を迫った。晝間は水汲み三百杯、夜は臼ひき夜を明かす。

〔補註〕

譯註稿(一)・(二)について、發表後以下のことに氣づいたので補足する。

○「做一床錦被遮蓋」註(稿一・五七頁)―成語。宋・周密『齊東野語』卷二「淮西之變」の條に「(酈)瓊登而言曰『尋常伏事太尉不周、今日乞一牀錦被遮蓋』」とあり、元刊本『看錢奴』第二折【呆古朶】に「做一床錦被都遮蓋」、『牆頭馬上』第二折【三煞】に「不肯教一床錦被權遮蓋」とある。

○「不俏」註(稿一・六九頁)―明・徐渭『南詞敍錄』に「俏俏、美俊也」とある。

○「奴家」註(稿一・九六頁)―明・徐渭『南詞敍錄』に「奴家、婦人自稱。今閩人猶然」とある。

○「人不可(倪)(貌)相海水不可斗(糧)(量)」註(稿二・一〇八頁)―『淮南子』「泰族訓」に「九州は頃畝す可からず、八極は道里す可からず、太山は丈尺す可からず、江海は斗斛す可からず」とある。

○「唧溜」註(稿二・一二九頁)―明・徐渭『南詞敍錄』に「唧溜、精細也」とある。

○「若得一官半職回來改換門閭」(稿二・一三四頁)―「一官半職」「改換門閭」は常語。『清平山堂話本』「陳巡檢・梅嶺失妻記」、『陳母教子』楔子、『救孝子』第一折、『漁樵記』楔子等に「一官半職、改換家門」とあり、元本『琵琶記』第四出に「孩兒做官、也改換門閭」とある。

○「做事欠商量……自有傍人話短長」註(稿二・一三五頁)―三・四句目の成語について、元・楊瑀『山居新話』卷一に、丞相桑哥に僞の上告で陷れられそうになった張九思のことばに「大家飛上梧桐樹、自有傍人話短長」とあり、このことばについて「語は鄙俚なり」という。また、「鳳凰落在梧桐樹」が特別にめでたいことをいう例としては、『毛詩』「大雅」「卷阿」に「鳳皇鳴矣、于彼高岡。梧桐生矣、于彼朝陽」とあるのを踏まえて、『千字文』に「鳴鳳在樹、白駒食場」といい、その北魏・李暹の註には「天から鳳凰が降りてくるのを瑞祥とする」という。